



発行：飯能市教育委員会生涯学習課（文化財担当） 〒357-0021 飯能市大字双柳94-25 Tel (042)973-2111

世界遺産ならぬ、「飯能遺産」を見つけてみよう

●「飯能地域遺産事典」のできあがり～

「はんのうお宝スポット」。タイトルだけ見ると何が書いてあるのかよく分からないですね。この小冊子は、飯能市にある歴史や自然といった地域の遺産に関する様々な情報、つまり「世界遺産」ならぬ「飯能遺産」をわかりやすくご紹介するために創刊するものです。これから定期的に発行されるこの冊子を綴じていただくと、飯能のことなら何でもわかる「飯能地域遺産事典」のできあがりです。

●「文化財時報」は？

これまで市から発信されるこういった情報は、「文化財時報」を通して提供されてきました。でも

この雑誌、実は48年ももの長い間継続して発行されている、まさに「遺産」というべきものなのです。これはこれでその伝統を大切に、文化財保護行政の活動報告書としての役割をより強くもたせ、文化財を所有、あるいは管理している人たちを主な対象として発行を続けていくこととなります。

●創刊号の特集は「はんのうの宝もの」

タイトルが「はんのうお宝スポット」ですから、まず最初に何と言っても飯能市の「お宝」を紹介しなければなりません。そこで、創刊号では文化財保護審議委員会委員と文化財担当職員が、「これこそ飯能の宝物だ!」と思うものをご紹介します。

特集「はんのうの宝もの」……

飯能市は植物の宝庫

文化財保護審議委員会 委員
手塚 映男

1 **植物から見た飯能市の特色** 飯能市の市域は、入間川、高麗川、直竹川の三つの川をほぼ西の方向にさかのぼって奥深く広がり、秩父市や横瀬町との境の尾根に達しています。市内で最も低い岩沢の入間川の河原の標高が約70m、秩父市との境界にある有間山が1213.5m、大持山近くの境界あたりが約1240mで、その差はおおよそ1170mもあります。飯能市はかなり内陸部にありますが、日本の森林帯からみると月の平均気温などから考えて、山麓地域や三つの川に沿った低地は暖温帯で、山地に入るにしたがって冷温帯に変わっていると思います。したがって飯能市では、関東地方

中部の暖温帯と冷温帯の植物が生育しており、そのうえ、山や谷など地形の変化に富んでいるので、いろいろな植物を観察することができます。そのため、天覧山・多峯主山をはじめ、棒ノ嶺、伊豆ヶ岳、顔振峠などには、昔から多くの研究者や愛好家が植物の調査や観察に訪れています。

2 **飯能市の自然林** 日本のように雨が多い土地では、自然のままにしておくと、高山など特別な環境の所を除き林ができます。暖温帯では、初めはアカマツなど日当たりを好む木の林ができますが、だんだんに変わって最後には日陰でも育つスダジイやアカガシなどカシ類の常緑広葉樹林ができ

ます。冷温帯ではブナやミズナラなどの落葉広葉樹林ができます。ここでは、まず、飯能市で観察できるこのような自然林の幾つかをあげてみましょう。

天覧山のスタジイの林 能仁寺の東側の登山道を登ると間もなく中段広場があります。そのすぐ上の登山道に沿って、幹の直径が50cm前後もあって、大きく枝を広げたスタジイの林があります。低い木の層には、ヤブツバキやヤブコウジなどシイ林を特徴づける種類もあります。ぜひ残しておきたい林です。なお、天覧山や多峯主山にあるマツ林や、コナラやイヌシテの多い林の大部分は、常緑広葉樹の林ができる途中の林だと思えます。これらの林も植物の種類が多いので機会をみて触れてみたいと思えます。

浅間神社のウラジロガシの林 上直竹の浅間神社の奥社へ登る広い尾根(標高約250m)に、ウラジロガシやツクバネガシとモミの木もいっしょになった林があります。低い木の層にはウラジロガシの幼樹やヤブツバキなどが生えていて暖温帯の上部の自然林の特徴をよく表しています。モミは、暖温帯から冷温帯にまたがって生えている木で、山地に入ると山の尾根などによく見かけます。秩父市への道を正丸峠の方に向かうとき、山の尾根にほかの木よりも高く生えているのが見られます。

大山祇神社のウラジロガシの林 正丸トンネルの手前の畑井から南に入った南川の標高380mほどの所に大山祇神社があります。神社の裏側の東向き急斜面にウラジロガシとツクバネガシが混じった林があります。ウラジロガシは、胸の高さの幹の直径が1m以上もある大木で驚きます。近くの子ノ権現(標高約640m)の西方にブナの林もあるので、暖温帯の常緑広葉樹林ができるのも、この辺りが限界に近いと考えられ、その意味からも貴重で埼玉県の天然記念物になっています。なお、これらの林は陽の当たりやすい東または南向きの

斜面にあることも興味を持たれます。

ミスナラやイヌブナの林 顔振峠(標高508m)のあたりから奥武蔵グリーンラインを飯能市で一番北の端にある刈場坂峠(東側のツツジ山の標高879m)に向かう道路際の林は興味深い所です。飯盛峠(標高780m)近くの尾根筋に、木を伐採したあとに自然にできたと思われるミスナラやヤマサクラの林があります。また、ぶな峠(標高782m)あたりから刈場坂峠にかけて、イヌブナ、ミスナラ、カシワなど冷温帯を特徴づける植物を点々と見ることができ、人手を加えないでよく冷温帯の林ができる所であることが実感出来ます。さらに、秩父市との境界に近い大持山から名栗の伝説で知られたウノタワ(標高1080m)あたりにかけて、ブナ、ミスナラ、カエデ類などの大木が林を作っていることが、平成16年に飯能市郷土館など5つの博物館などで行った企画展『入間川再発見!』で紹介されていましたが、標高が高い所では、冷温帯の特徴的な植物や林を多く見ることができると思えます。

ここでは自然林を中心に書きましたが、飯能市は貴重な自然林だけでなく、緑が多く景観も優れているので、ほぼ全域が埼玉県立奥武蔵自然公園になっています。この豊かな自然を飯能の宝として、これからも大切にしなければならぬと思えます。



天覧山のスタジイの林

燃えない工夫がいっぱい「絹甚」

きぬじん

飯能市教育委員会生涯学習課
熊澤 孝之



左下の写真を見てください。これは「絹甚」の店蔵の正面です。今から約100年前に建てられました。絹甚は建てられた当時のままの姿で、今も右の地図の所(本町2-2)に建っています。

日本の家は、今も昔も木で作られています。その為、火事は非常に恐ろしいものでした。特に昔は消防自動車もありませんでしたので、火事を消すことは大変でした。しかも近隣の川越では、明治26年に大火があり、街のほとんどが燃えてしまいました。ところが、この大火でも燃えなかった建物がありました。それが土蔵です。土蔵は屋根が瓦で壁は土でできています。窓には土でできた扉がついています。その為に火事でも燃えずに残ることができたのです。この経験を活かして、川越では大火以後、一斉に「店蔵」と呼ばれる建物が建てられるようになりました。店蔵とは、土蔵の火事に強い構造と、店としての機能を合わせ持った蔵造りの店のことをさします。

飯能でも明治30年代後半から店蔵が建てられるようになっていきました。その様ななかで建てられたのがこの「絹甚」です。

絹甚に見られる数々の火への備えを紹介します。

下の写真に墨で三番・四番と書かれた戸があります。これは「土戸」と呼ばれ、現在の防火シャッターと同じものです。書かれている番号は、土戸を閉める順番を示しています。土戸は縦長の板の上に土が

塗られ、火でも燃えないようになっています。普段は床下などにしまっていますが、近くで火事が起こると、店の入り口にこの土戸をはめ、燃え移るのを防ぎました。

次に中央の写真ですが、一階(下屋)の屋根の上に、小さい壁が両側に建っているのがわかります。これは「うだつ」と呼ばれています。これがいわゆる「うだつが上がらない」のうだつで、「出世できない」の意味になりました。うだつは、隣の火事が2階の窓に燃え移るのを防ぐ防火壁の役割を持ち、このうだつが火を受け、くい止めました。現在の飯能市に残っている店蔵6棟の中で、うだつがあるのはこの絹甚だけです。うだつの瓦には、右から「きぬや」の文字が刻まれています。絹甚が明治時代に、絹を扱う商売(周辺の村から絹を買い付けて、江戸や京都などの商人に売っていた)をしていたため、瓦にこのような文字を入れたのでしょう。

右下の写真は1階、奥の出入口です。非常に厚い扉(観音扉)が付いています。火事の時だけこの戸を閉めました。また、扉の奥には土が塗ってある引き戸があります。二重の備えをしていたのです。その戸には建てた人の名前(篠原長三)と建てた年(明治37年)が書かれています。

このように、当時の人は様々な工夫を凝らして火事から大切な商店を守ろうとしていたのです。



土戸 下屋

絹甚の外観



うだつ



引き戸 観音扉 一階奥観音扉

お墓の話 ～県指定史跡 中山信吉墓～

飯能市教育委員会生活学習課
村上 蓮哉

お墓の話をしませう。誰のお墓かという江戸時代の初めに水戸藩(徳川御三家の一つ)の付家老として活躍し、水戸光圀(「黄門さま」)を二代目水戸藩主として推挙したことで知られる中山信吉という人のお墓(埼玉県指定史跡「中山信吉墓」)です。

まず、お墓の形を見てみましょう。お墓は高さ4mに盛り上げられた塚と、その上に立てられた高さ3mの巨大な宝篋印塔の二つに分けられます。

宝篋印塔には立てられた年の年号(寛永二十一年1644)が刻まれており、その年号は信吉が亡くなってから2年後です。おそらく信吉の三回忌に塔が立てられたと推測され、塚もそれに合わせて完成されたと考えられます。中山信吉墓以外の中山家当主の墓には宝篋印塔が使われていないことから、何故信吉の墓にだけ宝篋印塔が採用されたのかは謎と言えます。この謎を追求すると、墓石の流通の様子や流行についてなどを明らかに出来そうです。

次に、塚について考えてみましょう。塚を持つお墓が他にあるか調べてみますと、加賀金沢藩(石川県)の前田家のお墓が、塚を造りその前に墓標を立てていました。しかし、東京都内に数多く残されている大名のお墓に塚を持つものはなく、中山信吉墓はお墓として珍しい形であるといえます。

巨大な石塔を上に乗せられるほど、しっかりした高さ4mの塚を造るという行為は並大抵のものではありません。塚を造った理由は何でしょうか。

それを明らかにする鍵は、中山信吉木碑(埼玉県指定書跡)にあると考えられます。木碑は彫刻された亀の甲羅の上に乗っており、墓前に造られ明治の頃に取り壊された御影堂という霊廟の中にありました。碑面には江戸時代初期の知識人として著名な林羅山の文章が刻まれています。林羅山は朱子学という儒学一派を学んだ学者として知られ、儒学は目上の者を尊ぶことをその教えに含みますので、もしかすると二代目当主の中山信正は、林羅山にかなりの影響を受け、塚を造って信吉を手厚く墓に葬ったと考えられます。中山信吉墓は中山信正の人物と思想がはっきりと表れたものであると言えます。

また、もう一つ例を挙げると、信吉の父の家範、祖父の家勝のお墓は、家勝と家範の墓が自然石で、簡素・自然であることを重視する禅宗の教えを墓石に反映したと考えられます。また、兄の照守の墓も無縫塔という卵のようにつるりとした、元々禅宗の僧侶の墓塔として立てられていた石塔です。

つまり、この三人のお墓(市指定文化財中山勘解由三代の墓)は禅宗という宗派の思想が三代にわたってお墓に表れていると言え、同じ一族ではありますが、信吉の墓とは異なった考えに基づきお墓が造られています。

このように、お墓には調べると特定の個人や一族、社会の様子を知ることができるものがあり、それはさながらタイムカプセルのようだと言えます。



県指定史跡 中山信吉墓(智観寺)



市指定文化財 中山勘解由三代の墓(能仁寺)



発行：飯能市教育委員会生涯学習課（文化財担当） 〒357-0021 飯能市大字双柳94-25 Tel (042)973-2111
平成18年3月31日創刊 第2号 平成19年3月20日発行

飯能の、森と植物を観察しよう

●第2号の特集は「はんのうの森と植物」

平成17年度に、飯能市にある歴史や自然といった地域の遺産（「飯能遺産」）をわかりやすく紹介するために創刊された『はんのうお宝スポット』ですが、第2号では森と植物を特集しました。二次林

についてと、飯能市にある天然記念物に指定されている樹木をまとめて紹介します。

その他、創刊号に引き続き文化財担当職員が考える「飯能の宝物」も紹介します。今号は遺跡の発掘調査についての話です。

特集「はんのうの森と植物」

飯能市は植物の宝庫(Ⅱ)－身近にある森と植物－

文化財保護審議委員会 委員
手塚 映男

1 **はじめに** お宝スポットの創刊号で、飯能市に残っている自然林を紹介しましたが、自然林が人手によって伐採されたり、台風や火災で被害を受けたとき、その後に来る林を二次林と呼んでいます。二次林は、時間の経過とともに林をつくる草や木の種類が変わり、気候の変動などが無い限り、以前あった自然林と同じような林になり安定します。この安定した林を**極相林**と呼び、植物の種類や生え方が時間とともに移り変わることを**遷移**といいます。ここでは皆さんの身近にある二次林を中心に観察してみましょう。

2 **天覧山の二次林** 天覧山の山頂を目指して能仁寺の東側の登山道を登り始めると、道の両側に幹の直径が50cmほどもある大きな常緑広葉樹が見られます。暖温帯に多く生えるシラカシです。この木は風よけなどのためによく家のまわりに植えられていますが、その名残りでしょうか？ その近くに幹の直径が40cmほどのモミの木もあります。モミはこの奥の方にも大きなものがありますが、家のまわりではあまり見かけません。そうすると先ほどのシラカシも、家のまわりにあった木の名残りというのは疑問になります。登山道が左に曲がっ

て少し登ると、道の両側に、高さが2m以上にも伸びたヤマツツジがたくさん出てきます。この辺りの道の北側に少し入った所にコナラ、ヤマザクラ、イロハモミジ、それに大きなアカマツなどの木を観察することが出来ます。コナラは知っている方も多いと思いますが、大きなドングリのできる木です。これらの木はいずれも二次林に多い木なのです。しかし、アカマツが何となく元気がありません。よく見ると、まわりの木の葉が茂ったところには枝は枯れてありません。後から伸びてきた木の枝と触れあって日が当たらなくなると枯れてしまうのです。マツは二次林の早い時期に林をつくる木といわれています。では、このあたりには昔はどのような森があったのでしょうか？ それを考える前にもう少し登ってみましょう。間もなく中段広場に出ます。話はちょっと横道にそれますが、ここから山頂への登り口の手前に、大きな針葉樹で葉のつき方に特徴のある木があります。コウヤマキで、この木は、世界で日本の高野山などだけに生育しています。このような植物を**固有種**といいます。竹寺にも幹の直径が約110cmもある大きなものがあり、飯能市では天然記念物に指定し保護しています。

3

天覧山の極相林

広場から登り始めると道の両側に前回紹介したスダジイの森があります。範囲はあまり広くないですが、高木層を占めるスダジイは幹の直径が60cmほどの大きなものもあり、アラカシやシラカシの大きな木もいっしょに生えています。林内は暗く、低木層は人手が加えられているようですが、スダジイやアラカシの幼樹のほか、ヤブツバキ、ヒサカキ、草本層にはヤブコウジ、マンリョウなどこれまでと違った種類が多く見られ、この地域の極相林の様子を示しているように思われます。このような森は、飯能付近ではもうあまり見られません。この森から考えると、これまで観察してきた所は、昔はスダジイやアラカシ、シラカシなどが多く茂った森だったことが考えられます。入口付近にあったシラカシやモミの木もその一部だったことも考えられます。それが山火事か、あるいは切り開かれて、そこにアカマツを植えたか、または生えて二次林が出来はじめ、そこにコナラなども生えて成長し、現在のような遷移の途中の林に移り変わってきたことが考えられます。

4

天覧山のアカマツ林

登山路を登りつめると、山頂の北西側のかなり広い区域にアカマツの見事な二次林が見られます。日当たりが良い所なのでアカマツの高さは20m以上に達していると思いますが、やはりその下には、コナラやヤマザクラ、イロハモミジなどが追いかけて成長しています。けれども高さは10mぐらい

までで、マツの枝はまだ上の方に残っており、マツ林の状態を保っています。しかし本数は少ないようでし、後を継ぐ小さなマツも見当たりません。もし、台風などで倒れたら、この場所はコナラなどの多い二次林に遷移するように思われます。林内はスダジイの森より明るいので、ムラサキシキブ、アオハダ、ヤマツツジ、オトコヨウゾメなど、また、草本類もヤマユリ、チゴユリ、ノコギリクなどたくさんの種類を観察することができます。

5

二次林は豊かな森

二次林には、地形など環境の違いによって、クヌギ、クリ、イヌシデ、エノキなどの木や、草は季節によってスミレ・ラン・キクのなかまなどたくさんの種類が出てきます。例えばハンノウザサで知られた見返り坂から多峯主山に登る坂道のあたりにはイヌシデなども多く、春には新緑の美しい二次林が見られます。また、二次林には鳥や昆虫も多く、場所によって雑木林、里山とも呼ばれ、昔から人々の生活と深い関わりを持ってきた林が多くあります。最近では緑の保全、生物多様性の持続などのために価値が見直されています。飯能市は森が多だけでなく、場所によって生えている木や草が異なり変化に富んでいます。皆さんの身近にどのような二次林があるか、木や草の種類だけでなく、高木層や低木層にはどのような種類が多いか、天覧山の森などと比較しながら観察すると、きっと、新しい発見があると思います。



天覧山山頂付近のアカマツ林



①子の権現の二本スギ(県指定)

標高約600mの山頂にある天龍寺(子の権現)の山門外に、南北に立つ二本の大杉です。樹齢推定800年です。初めて山に登った子の聖が地面にさした、二本の誓が根付いた霊木と伝えられています。



②南川のウラジロガシ林(県指定)

標高約380mにある大山祇神社^{おおよまづみ}の裏側の東向き急斜面にあるウラジロガシとツクバネガシが混じった林です。紀伊半島や伊豆半島などに見られる暖温帯の常緑広葉樹林が、飯能のような内陸部にあるのは珍しく、貴重な林です。



③高山不動の大イチョウ(県指定)

標高約600mにある常楽院(高山不動尊)の境内にある大イチョウです。樹齢推定は800年で、幹からたくさんの気根が垂れ下がっており見事です。この気根を乳房に見立て、母親が育児のときに母乳が良く出るように祈ったことから、「子育て銀杏」とも呼ばれています。



飯能の 代表的な木々

(県・市指定天然記念物)



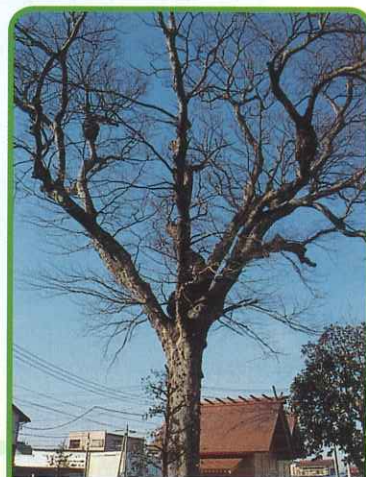
④竹寺のコウヤマキ(市指定)

標高約490mにある八王寺(竹寺)の境内にある大きなコウヤマキです。コウヤマキは日本にしか見られない貴重な植物で、竹寺のコウヤマキは樹齢推定400年の巨木です。太田道灌が植えたといわれ、「道灌榎」とも呼ばれています。



⑤滝の入タブの木(県指定)

富士浅間神社裏山の標高約275mの斜面にあるタブの木です。樹齢推定700年です。タブの木は日本では本州南部・四国・九州に多く見られ、滝の入タブの木は巨木であるとともに、タブの木が分布する範囲の中でも最も北にあり貴重な木です。



⑥飯能の大ケヤキ(県指定)

加治小学校の北、神明神社の境内にある大ケヤキです。樹齢推定700~800年で、まっすぐ伸びた幹から枝が四方に広がる様子が見事な巨木です。ケヤキは武蔵野の田園風景の中で代表的な木で、埼玉県の県木になっています。

縄文時代のしょっぱい話 ー熊坂遺跡の製塩土器ー

1

熊坂遺跡でのちいさな発見

平成17年の春、飯能市川寺の加治橋のそばで縄文時代の遺跡の調査がおこなわれました。この遺跡は熊坂遺跡という、縄文時代もおわりに近い後期～晩期中頃といわれる時期のムラの跡です。

この熊坂遺跡の調査中ちいさな、しかし重要な発見がありました。たくさんの土器にまじって、もようもない薄い土器のかけらが土の中から出てきたのです。一見なんの変哲もないちいさな土器のかけらがなぜ重要なのかみていくことにしましょう。

2

「塩づくり」の土器

みなさんの食生活に欠かせない「塩」、日本ではいつからつくられたか知っていますか？じつは縄文時代の後期終末～晩期中頃、当時まだ海の一部だった霞ヶ浦で塩づくりははじまったのです。

縄文時代の塩づくりは、土器で海水を煮詰めて塩の結晶をとり出す方法だったと考えられています。塩づくりにつかわれた土器を「製塩土器」とよんでいます。その特徴は表面をけずって仕上げる、もようのない薄い土器でした。そう、熊坂遺跡でみつかったかけらはこの製塩土器だったのです。

3

海の味 ー塩の風味ー

製塩土器の存在は飯能の縄文人が「塩」を手に入っていた証拠といえるでしょう。しかし熊坂遺跡で直接塩づくりがおこなわれていたとすぐに考えるわけにはいきません。なぜなら飯能には塩をつくる原料の海水がないし、製塩土器はわずかな量しかみつかっていないからです。つまり熊坂遺跡の製塩土器は、塩づくりをおこなっていた海辺のムラから塩とともに運ばれてきたと考えられるのです。

塩は食物を保存するためにつかわれた可能性もありますが、もともと自然には塩の結晶が存在しない飯能周辺ではそうした生活必需品としてではなく海の味、つまり塩の風味を味わうための役割が大きかったのではないのでしょうか。塩味の効いた食べ物は飯能の縄文人にとって、普段は味わうことのできない特別なごちそうだったことでしょう。

定住のはじまった縄文時代ですが、ムラのまわりの資源だけでなくたとえば信州や伊豆諸島から石器づくりの材料が運び込まれているなど、遠くはなれた地域の物資も何らかの方法で手に入れて積極的に利用していることが知られています。

このように製塩土器＝塩という視点で考えていくと、熊坂遺跡の製塩土器からは、縄文時代のおわり頃に海の資源が塩という結晶のかたちで、縄文人のネットワークによって運ばれていた可能性が考えられるのです。

また、ほかの可能性としては、製塩土器はほかの土器にくらべて熱のまわりが早い特徴をもつため、塩とは関係なくこうした土器自体を熊坂遺跡の縄文人が必要としたのではないかとする別視点の考えもあります。

4

遺跡はおもしろい！

遺跡や遺物（土器や石器など）は縄文人が身のまわりの環境へはたらきかけた方法を教えてくれます。こうしたものを通じてわたしたちは飯能の土地や自然に根ざした縄文文化とはどのようなものだったのかをさまざまな視点から検証できるのです。熊坂遺跡の製塩土器は今後さらなる分析が必要ですが、ほかの地域との関係や縄文時代の食文化を知るうえで重要な発見といえます。遺跡にはこうしたちいさな発見が無数に埋まっているのです。だから遺跡はおもしろい！



熊坂遺跡からみつかった「製塩土器」のかけら

土器の表面が薄くはがれていたり、つよい火で赤やピンクに変色していることも塩づくりにつかわれた痕跡と考えられています。

背景写真：霞ヶ浦の製塩土器 土浦市上高津貝塚出土（上高津貝塚ふるさと歴史の広場発行 『内海の貝塚』より転載）

お宝スポット



発行：飯能市教育委員会生涯学習課（文化財担当） 〒357-8501 飯能市大字双柳1-1 Tel (042)973-2111
第3号 平成20年3月31日発行 平成18年3月31日創刊

飯能の 建造物と植物 を学ぼう

●第3号の特集は「飯能の建造物と植物」

第1、2号は植物の特集でしたが、今回は「建造物（長光寺本堂）と植物」を取りあげました。建造物は難しい面もありますが、日本の歴史をたどる

ことのできる代表的な文化財です。これを機会に、有名な建造物をじっくり見てみましょう。

植物はシリーズの第3回目です。様々なみかたで植物を観察してみましょう。

特集「飯能の建造物と植物」...

1 長光寺本堂

飯能市教育委員会生涯学習課
曾根原 裕明

1 **はじめに** 長光寺は飯能市大字下直竹にある曹洞宗寺院です。長光寺には多くの文化財があります。国指定重要文化財「雲版」、県指定文化財「長光寺本堂」、「長光寺の惣門」、市指定文化財「長光寺三門」があります。雲版は正和2年(1313)銘が記されており、鎌倉時代末期のものと考えられます。

2 **長光寺の歴史** 長光寺は貞治5年(1366)、僧通海良義により開創されたと伝えられています。通海は、曹洞宗太祖瑩山の弟子峨山の弟子により開創された奥州の正法寺(岩手県奥州市)2世月泉の弟子です。そのためか、長光寺は関東地方において、曹洞宗では最も古く開かれた寺院の一つです。また秩父の広見寺は明德2年(1391)に長光寺2世天光良山が開創しています。長光寺は正法寺の末寺でしたが、江戸時代に飯能市の能仁寺の末寺となりました。

重要文化財「雲版」は曹洞宗が広がる過程で長光寺にもたらされたものと考えられます。

伽藍再興 長光寺は江戸時代の初めに伽藍が再興されました。境内の銅鐘の銘文には、岡部六弥太の子孫、岡部小右衛門忠正が妻と共に堂宇の朽敗を嘆き、寛永15年(1638)に伽藍を再建したことが記されています。

長光寺本堂、長光寺の惣門、長光寺三門は同時に再建されたと考えられます。長光寺本堂は曹洞宗本堂の国内に残された最も古い形態をもった江戸時代初期の建物です。

3 **仏堂と伽藍** 長光寺本堂は平成11年度に半解体修理工事が完成し、再建当時の姿がよみがえりました。これから仏堂と伽藍(寺院境内の建物の配置)の簡単な歴史についてみていきましょう。

仏堂はお寺の本尊や宗派の開祖、お寺の開山(お寺を開いた僧)などの仏像を祀った建物です。伽藍は、古くは法隆寺に見られるように塔と金堂(仏堂)が回廊の内側にあり、講堂が回廊の外側にありました。回廊の内側は仏の聖域でしたが、徐々に講堂が回廊の内側に取込まれ、人が聖域に入り込むようになっていきました。仏像を祀る建物に、人が仏を礼拝するための建物が並んで作られるようになり、さらにそれが一つの建物でできるように工夫されていきました。中世の密教仏堂(天台宗・真言宗)には5間四面の建物の前側に外陣、後側に内陣があります。これにより外陣から、多くの人が参拝できるようになりました。

禅宗では修行が重んじられ、僧堂で坐禅を行い、法堂(曹洞宗)や方丈(臨済宗)では住持(住職)による修行僧

への説法や儀式が行われました。また仏殿には本尊が祀られていましたが、徐々に法堂や方丈に本尊が祀られるようになり本堂と呼ばれるようになりました。

禅宗の伽藍として有名な七堂伽藍は山門、仏殿、法堂、僧堂、庫裡、東司(便所)、浴室が回廊で結ばれ、中央に仏殿があります。伽藍は山門、仏殿、法堂が直線上に並ぶのが特徴です。

4 長光寺本堂 長光寺本堂は桁行11間、梁間7.5間で、寄棟造りの茅葺型銅板葺の屋根です。修理前の屋根は茅葺でした。今回の修理工事において広縁前の土間が復原されました。長光寺の間取りは土間、広縁があり、部屋は前後2列、横4列で8室になっています。

曹洞宗本堂の間取りは臨済宗の方丈に近いものです。方丈は本来住持(住職)が住んだところ。臨済宗の方丈(本堂)は広縁と2列6室で、中央前列に室中、後列に仏間があり、室中は板敷きで周囲に畳を敷いており、儀式がおこなわれます。曹洞宗間取りは土間、広縁、2列8室が主になっています。これは方丈の2列6室に対して向かって右に2室が加わったものと考えられます。そのため、曹洞宗本堂は向かって左2列目に主となる部屋があり、前列の大間(臨済宗の室中)は畳敷きで儀式が行われます。

長光寺本堂の大間奥の内陣(臨済宗の仏間)には来迎柱、須弥壇がありますが、当初は存在せず、通し仏壇に両祖像、開山像等が祀られていたと考えられます。須弥壇は本尊を祀るための壇で、後ろ側に来迎柱が2本あります。

曹洞宗初期の本堂は回廊が広縁前の土間で結ばれています。広縁、2列8室と土間の存在が初期の曹洞宗本堂

の特徴です。

長光寺は惣門、三門(山門)、本堂が直線上に並んでいます。惣門(総門)は山門の前に設けられる小さな門です。長光寺の寛政2年(1790)の絵図には鐘樓門、衆寮、庫裡、本堂が描かれ、本堂の前には、「仏殿大破跡」と記されており、仏殿が存在したことが窺われます。衆寮は、この時代の修行僧の存在を推定でき、衆寮が僧堂としての役割を果たし、坐禅修行、睡眠、食事等が行われ、反対側の庫裡で食事の準備が行われたと考えられます。雲版は主に食事等の合図に鳴らされますが、庫裡に吊るされ鳴らされたものと考えられます。

長光寺では伊勢湾台風(昭和34年)のときに中雀門、回廊が壊れています。長光寺にはもともと七堂伽藍に近い形があったものと考えられます。今回の復原工事によって七堂伽藍に近い形であった長光寺本堂がよみがえることになったと言えるでしょう。

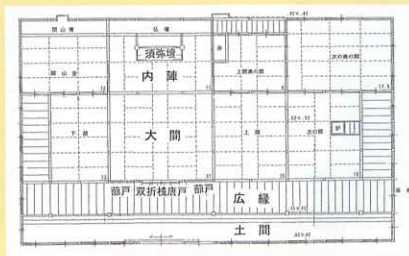
修理工事 本堂工事では土間復原、屋根工事に他に、軸部、軒、小屋組、建具等の修理を行いました。正面、側面の建具は、鴨居、敷居に3本溝(江戸時代前半に見られる)があったため板戸2枚と、明り障子1枚に変更しました。大間入口中央には双折棧唐戸を整備し取付けました。双折棧唐戸は二つに折れる両開き板戸で、表面が棧で縦横に仕切られており、上部には岡部家の家紋「跳十字」があります。双折棧唐戸の両脇間は部戸の金具の痕跡が残されていたため、部戸を復原しました。部戸は格子状の戸で、上下に別れ、上の部戸は90度、外開きになり金具に吊るし、下の部戸は取り外しができるようになっています。双折棧唐戸と部戸の存在は初期の曹洞宗本堂の大きな特徴です。



長光寺本堂



土間・広縁・双折棧唐戸



長光寺本堂平面図

1 はじめに

「お宝スポット」では、これまで飯能市の極相林など自然林を取りあげてきましたが、今回は飯能市に生育する特徴的な植物の幾つかを紹介したいと思います。

2 飯能市の巨木類

タブノキ 上直竹の富士浅間神社の裏山で、目通りの幹周りが約5.5m、木の高さは20m以上に達する巨木が見られます。クスノキ科の常緑の高木で、初めて見たときは、あまりの大きさに驚きました。幹の下の方から枝があり、斜面でも太陽の光を受けられるようになっています。黄緑色の花をつけ黒紫色の実を結びます。日本の暖温帯の極相林に多く、東北地方では海岸に限られますが、関東地方では平野部につながる山麓地帯まで見られますが、平野部では少なくなっているようです。

ウラジロガシ 「お宝スポット」の1号でも紹介しましたが、南川に目通りの幹周りが3m前後もある巨木が森をつくっていて、埼玉県の天然記念物に指定されています。ブナ科の植物で、葉は細長くて先端近くに鋸歯があり、葉先も尖っています。葉の裏が白くなるのが特色です。暖温帯でも温度の低い地方に多いようです。

カシのなかまは、飯能市には、このほか**アカガシ**、**ツクバネガシ**、**アラカシ**、**シラカシ**などが生育していますが、アカガシは生育地が限られているようです。

巨木類はこのほかにも、子の権現の二本杉など(「お宝スポット」2号写真参照)がありますが、それぞれの場所の歴史などを伺うことができ大切に保存したいものです。



タブノキ

3 「ハンノウ」という名まえのついた植物

ハンノウザサ 植物学者として有名な牧野富太郎博士が発見し、1926年に「ハンノウザサ」という和名をつけ新種として発表した植物です。しかし、後にアズマザサと同じ種類であるとされましたが、飯能市で発見され名前がつけられたことで「見返坂の飯能ササ」として埼玉県の天然記念物になっています。稗(イネ科の植物の茎をいう)は高さ1m前後になり、濃い紫色をおびやすく、また、枝先につく長さ15cmほどの葉の裏には細毛が多く、なでると柔らかな毛の多い布にさわっている感じをするのが特徴です。日当たりを好む植物ですが、周辺の木が高くなって暗くなり、現在では道ばたに残るだけとなったので、市でも保護に努めています。

ハンノウツツジ 高さは1mほどで、葉はサツキより幅が広く大きめですが光沢があり、花はサツキに似ています。東京大学教授や国立科学博物館長をされた中井猛之進博士が、1915年に植物学雑誌に新種として発表しましたが、現在でもハンノウツツジという名前で掲載している植物図鑑もあります。天覧山で観察するのは難しいですが、市内の所々に植えられています。

なお中井猛之進博士は、天覧山はツツジが多く、東京付近ではこれ以上の所は少ないだろうとも書いています。最近でも**ヤマツツジ**、**バイカツツジ**、**ミツバツツジ**、**アブラツツジ**などの生育が確かめられています。



ハンノウザサ

4

絶滅が心配される植物

カタクリ 岩淵に飯能市が天然記念物に指定しているカタクリ・イカリソウ群落があります。カタクリの花も見事ですが、少し遅れて咲き始めるイカリソウも花の形が変わっていて興味を誘います。カタクリは、このあたりの山麓地域では北向き斜面の山裾で多く生えているようですが、市内には、埼玉県の絶滅危惧種で、細長い葉の中軸に白い筋があつて、長く伸びた花茎の先に白い花を一つつけるカタクリとヒロハノアマナ(ユリ科)がいっしょに生えているところもあります。今でも見られるのは地元の方々のご努力のお陰だと思います。

春から夏にかけて美しい花をつけるユリ科やラン科の植物には、埼玉県の絶滅危惧種となっている種類が多いですが、そのうち、ヒロハノアマナのほかにもアズマシライトソウ、コオニユリ、エンレイソウ(以上ユリ科)、エビネ、キンラン、サイハイラン、クマガイソウ、カキ



イカリソウ



カタクリとヒロハノアマナ

ラン、カヤラン、クモラン(以上ラン科)などが飯能市で生育していることが確かめられています。なお、絶滅が心配される種類はこのほかにもたくさんあります。

5

豊富なシダ植物

ウラジロ 正月のお飾りにも使う植物で知っている方も多いと思います。シダ植物で葉は高さ1m以上にもなり、羽片は二股状に出て裏面が白くなっています。埼玉県では飯能市をはじめ寄居町にかけての山麓地域の所々に生育しています。これはほんの一例で、飯能市では天覧山をはじめ多くの所でたくさんのシダ植物を観察できます。春から秋にかけてシダ植物に出会ったら、葉の形や葉をそっと裏返して観察してみましょう。葉の裏に孢子囊をつけてふえる種類が多く、そのつき方は種類によって違うので、できれば虫眼鏡を使ってみると自然の秘密をまた一つ知ることができるでしょう。

6

終わりに

飯能市でこれまでに生育が確かめられている植物は、種子植物が約1130種、シダ植物が約135種ありますが、調査が進めばもっと多くなると思います。特徴のある植物もまだまだたくさんありますが、次の機会にしたいと思います。皆さんもぜひこれまでに注意しなかった植物の観察に挑戦してみてください。環境問題で重要な課題となっている緑の保全ということから考えても、この多様性に富んだ飯能の自然は、ぜひ守っていかなければならないと思います。



ウラジロ



発行：飯能市教育委員会生涯学習課（文化財担当） 〒357-8501 飯能市大字双柳1-1 Tel (042)973-2111
第4号 平成21年3月31日発行 平成18年3月31日創刊

飯能の石仏と獅子舞を学ぼう

● 第4号の特集は「飯能の石仏と獅子舞」

今回は石仏と獅子舞を取りあげました。市内には多くの石仏があります。飯能の石仏を知ってもらうために、今回から3回のシリーズで飯能の石

仏を紹介していきます。

平成19年度に6件の獅子舞が市の指定文化財となり、旧名栗村の獅子舞と併せると9件の獅子舞が指定文化財となりました。

特集「飯能の石仏」 — 知って学んで守っていくために — 第1回

日本石仏協会会長
飯能市文化財保護審議委員
坂口 和子

1 **はじめに** 私たちの住んでいる飯能市には道ばたにひっそりと佇んでいる石仏が沢山あります。気にしなければ目にも止まらず通りすぎてしまうほど何気ない風景です。でも時には新しい赤いよだれかけが鮮やかに目にのこったり、お地藏さんの足元に小石やお花が供えられていたり、お年寄りが掃除をしたり、手を合せて拝んでいるのを見ることがあると、心と立止まることがあります。

石仏たちは私たちのご先祖がのこした信仰（神仏を信じてうやまうこと）の遺産なのです。昔の人がそれぞれの暮らしを大切に、一生懸命生きて証しとしてたてられたものですから、大きいえば日本人の精神文化の遺産ともいえるでしょう。

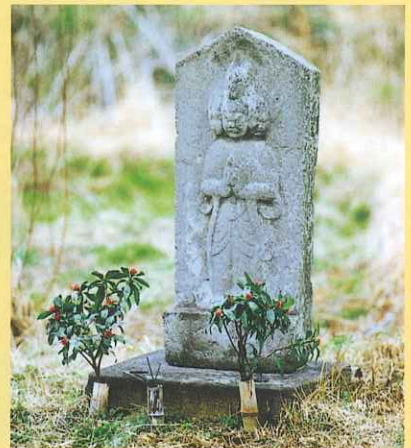
多く道ばたにたてられているのは、近隣の人が集まって「講」を組んだり、字ごと、村ごとに集団を作ってお祀りしたのだからです。村人が災難にあわないよう、平和で幸せな暮らしができるようにと神仏にお願いしたのです。

もちろん石造りで雨ざらしのため自然に崩壊してしまったものも沢山ありますが、現今の社会の変化にともない、開発や盗難などによって多くの石仏が失われていることも確かです。

100年も200年も300年も前から私たちの暮らしを見守ってきた石仏たちを、これからも大切に守っていきたいと思わないではいられません。次の世代に受け継いでいただくために、石仏を学ぼうではありませんか。

そこから私たちの郷土と先人たちの生き方が見えてくるはず。自然の恵みに感謝し、神仏をうやまい、素朴に生きた先人のメッセージを聴きとりましょう。

2 **石仏ってなんでしょ** 「石仏」とかいて「イシボトケ」と読んでもまちがいはありませんが、「セキブツ」が現在は定着した呼称です。「石神」は「イシガミ」と読んでもいいのですが、「セキジン」で通っています。石で造った仏さまが「セキブツ」、石で造った神さまが「セキジン」で仏も神もいっしょにした呼称として現在は「セキブツ」が使われています。



馬頭観音

3 石仏はどこにあるのでしょうか 石仏を知るためにはまず見るのが大切です。石仏はどこにいけば見られるのでしょうか。道を歩くとときどき小さなお堂のなかに石の仏さまが立っているのをみかけることがあります。また車や人の往来する道ばたや交差点の角、田畠あぜの畦みち、神社やお寺の境内けしだい、沼や川のほとり、山の上などに安置されています。つまり石仏はすべて屋外に置かれているものです。寺院のご本尊もくちようはたいてい木彫ちゆうぞう(木材を彫刻したもの)が鑄造(金属でできたもの)が主になっていて本堂の奥におごそかに飾られて安置されていますが、石仏はほとんど屋外に雨ざらしでお祀りされています。これが寺院の仏像とちがう石仏の特徴です。

4 石仏はいつから造られたのでしょうか 日本の石仏の最古のものは奈良時代(7世紀)にさかのぼりますが、関東地方は江戸時代になってから造られたものが多いでしょう。飯能市で一番古い石仏は江戸前期の寛文年代で今から350年前になります。市内の石仏の悉皆調査をした報告書が刊行されていますが、それによると江戸時代中期(1700~1800)に最も多く造られています。

庶民(一般の人たち)の生活が向上し、経済的にも余裕が出てきたことが考えられます。明治時代になって急に造塔数が少なくなるのは、神仏分離しんぶつぶんりという政策を明治政府が行ったからだと思われます。石仏はその時代の社会全体の動きや経済と密接にかかわっていることがわかります。

5 石仏は何のために造られたのでしょうか 私たちが生きていくためには食物が一番大事です。昔の人は田や畠を耕し、穀物や野菜を植えて収穫し、生きる糧かてにし

ていました。また農民は税金として米や作物を納めていました。大事な農業にとって気がかりなのは天候です。自然きよういの脅威からいかにして逃れ、農作物や山の幸、海の幸が豊かであることを願い、また天災や人災がふりかからないように願いました。それと同時に村に悪霊が入りこまないよう、子孫が順調に繁栄するよう、病気になるまいよう、その上後生ごしよう(死んだあと)も安楽であるようにと、真剣に神さま、仏さまをお祀りしました。その証しが沢山の石仏たちなのです。社会保障も病院もない時代、祈りの対象を身近に置くことによって心の平安を得ていたということでしょう。

6 石仏にはどんな種類があるのでしょうか 石仏の種類はおどろくほど多く500種類は下らないといわれています。飯能市内には50種類の石仏が存在しています。石仏の種類が多いということはそれだけ人々の悩みや願望が多いということの証拠です。そのなかで私たちがよく見かける石仏は、地蔵菩薩じぞうぼさつ(おじぞうさま)、観音菩薩かんのん(かんのんさま)、庚申塔こうしんとう(こうしんさん)の三つです。この三つの石仏は日本中どこへ行っても無いところはありません。飯能市は現在わかっている石仏が915基ありますが、お地蔵さまが多く全体の50%を示しています。石仏のみなもとは仏教にありますから寺院のご本尊と同じものが造られています。仏さまの世界は如来(によらい)、菩薩(ぼさつ)、明王(みょうおう)、天部(てんぶ)に区分されています。石仏も同じように造られますが、木彫仏ほど正確な表現はされていないものが多いようです。また日本人が昔から信仰してきた神さまもあり、仏教の仏さまといっしょになった石像などもありと、庶民の信仰の多彩さを知ることは楽しみでもあります。

7 石仏から何がわかるのでしょうか 石仏は小さな石の塊と思うかもしれませんが、実は沢山の情報を持っている“歴史の証言者”のようなものなのです。石仏の前に坐って目線で触れあえばきっと何かを伝えてくれます。頭をなでたり、裾のゴミを取り払ったり、後にまわって背中をみたり、彫られた字が見つかったらとにかく読む努力をしてみましよう。それが石仏を学ぶことなのです。次回は石仏の像容のいろいろを、また文字による情報の受けとり方を学んでいきたいと思ひます。



地藏菩薩



大日如来

1 しし・シシ・獅子? 宮崎駿監督のアニメ映画『もののけ姫』を観たことがありますか? この映画の中に、生命と死をつかさどる「しし神」という神様が出てきます。

話は変わって、「獅子舞」とは、木などで作った動物の頭のつくりものを人がかぶって、祭で舞うものです。



アニメの「しし神」と「獅子舞」、どんな関係があると思いますか? 映画の中の「しし神」様は宮崎監督が想像で生み出したものですが、カモシカのような姿で描かれていました。

古い日本語で「しし」とは野生の動物のことで、いのしし(猪)・かのしし(鹿)のような名前にも「しし」という言葉が使われています。

そして、東日本に伝わる「獅子舞(ししまい)」の中の「しし」という言葉も、中国の「獅子」だけではなく、日本語の「しし」の意味が重なっているとも言われています。では、なぜ、人がわざわざ動物の頭のつくりものをかぶって舞うのでしょうか?

2 悪魔はらいのヒーロー 昔の人は、伝染病や日照り・洪水のような災いは、地上をただよっている、目にみえない悪い霊がひき起こすと考えていました。そこで、イノシシや鹿・熊などの強い霊力を借りて、悪い霊を追い払ったり、しずめたりしようとしたのです。

獅子舞の「しし」は、人の力の及ばない、大きな自然の象徴ともいえます。ですから、さらに強い想像上の生き物、「獅子(ライオン?)」や「龍(ドラゴン?)」の頭をかぶるところもあります。

どんな形の頭をかぶっても「しし舞い」と呼ぶのは、こんな理由からです。

①の写真をみてください。これは「龍」の形をした頭で、鳥の羽でつくった長い尾は、龍の胴体を表しています。こわいような神々しいような不思議な表情をしていますね。

この頭をかぶって舞い、災いを追いはらい、世の中の幸福を願うのが獅子舞という芸能です。

〈写真①〉

3 ししは、どこにいる? さて、この「獅子舞」、かつて埼玉県内で250箇所あまりの獅子舞が行われていたといえます。一口に獅子舞といっても日本国内いろいろな種類があります。

東日本や埼玉県に多いのは、②の写真のように、男獅子2匹・女獅子1匹(計3匹)がお腹に太鼓をくくりつけ、この太鼓をたたきながら舞うもので、



〈写真②〉

「三匹獅子舞」と呼ばれています。実は、飯能市内にも三匹獅子舞のお祭が行われる神社が10箇所あります。

4

ししの舞い

うっそうとした神社の森の下、

太鼓とササラ(竹で作った擦り楽器)、哀調を帯びた笛の調べのもと、異形のししが舞う姿は一種独特なものです。三匹獅子舞の音楽は、お囃子のようにテンポが速くにぎやかなものではなく、むしろ淡々と素朴で力強いリズムを刻みます。その中でししはどんな舞いを舞うのでしょうか？

ししの舞いは、「舞う」のではなく「狂う」と表現されることがよくあります。人ではなく威力のある神様になりきって踊る様子を表しているのでしょう。獅子舞を見ていると、時々、中身が人ではなく、本当の獅子や龍が舞っているような不思議な気持ちになることがあります。

舞いの中に本物の剣を使う「白刃」という演目があるのも、悪霊を斬り伏せる意味合いがあるようです。飯能市内では、下名栗や北川の獅子舞で今でも「白刃」の演目を見ることができます(写真③)。



〈写真③〉

5

舞いのストーリー

このように、しし舞いは、

舞うことそのものにも意味があるのですが、同時にストーリーをもつ演目もあります。その代表的なものは「女獅子隠し」でしょう。

「女獅子隠し」は、男獅子二匹が女獅子をめぐる争う物語です。激しい争いの表現があったり、道化が出てきて争いをちゃかしたりします。最後には、山の神様など



〈写真④〉

の仲介で仲なおりをします。この他、演劇的でユーモラスな仕草をする演目もあります(写真④)。

6

獅子舞を見たいと思った方へ

獅子舞は地

域の神社やお寺の祭礼です。地元の方へ挨拶する気持ちは忘れずに。そして写真を撮る時は、舞いや祭の邪魔にならないよう気をつけて。

《飯能市内で獅子舞がおこなわれる社寺・祭の日時》

- ・北川 喜多川神社 (8月17・18日)
- ・南川 花桐 諏訪神社 (8月16・17日)
- ・吾野 三社 我野神社 (7月最終土曜日) 〈写真②〉
- ・長沢 阿寺 諏訪神社 (10月第2日曜日) 〈写真①〉
- ・上名栗 檜淵 諏訪神社 (8月17日後最初の日曜日)
- ・上名栗 星宮・諏訪神社 (9月最終日曜日・4月第3
または第4日曜日) 〈写真④〉
- ・下名栗 諏訪神社 (8月第4土・日曜日) 〈写真③〉
- ・小瀬戸 浅間神社 (10月15日に近い日曜日)
- ・飯能 諏訪八幡神社 (11月、飯能祭)

※大字高山 三輪神社 (祭礼休止中)

《もっと詳しく知りたい方へ》

『飯能の獅子舞—舞い狂う祓いの芸能』

飯能市教育委員会 2005年

(問い合わせ 飯能市教育委員会生涯学習課)



発行：飯能市教育委員会生涯学習課（文化財担当） 〒357-8501 飯能市大字双柳1-1 Tel (042)973-2111
第5号 平成22年3月31日発行 平成18年3月31日創刊

飯能の石仏と歌碑を学ぼう

●第5号の特集は「飯能の石仏と歌碑」

今回は石仏と歌碑を取りあげました。市内には多くの石仏があります。前回から3回シリーズで飯能の石仏を紹介しておりますが、今回は第2回

目となります。

市内には歌碑や句碑など多くの文学碑があります。この中から和歌(短歌)を石に刻んで建てた歌碑を五基ご紹介いたします。

特集「飯能の石仏」一知って学んで守っていくために 第2回

日本石仏協会会長
飯能市文化財保護審議委員会委員長
坂口 和子

1 **石仏の種類とお姿、その信仰** 第1回では石仏について、石仏って何？ どこにあるの？ いつから造られたの？ 何のために？ どんな種類があるの？ 石仏から何がわかるの？ ということを簡単にお話しました。今回は石仏の種類とお姿、また信仰の内容などをお話しましょう。

飯能市内には約915基の石仏が存在し、50種類の石仏がありますが、そのなかで一番多いのは地蔵菩薩じぞうぼさつ（おじぞうさま）です。次が馬頭観音菩薩ばとうかんのんぼさつ（ばとうかんのん）、3番目が庚申塔こうしんとう（こうしんさま）で、この三種類が路傍の石仏の主流といってよいでしょう。多いものから紹介しましょう。

2 **地蔵菩薩** 日本国中どこへ行っても目にすることがある仏さまで、人気ナンバーワンといえましょう。お姿は多く丸彫りまるぼ（立体的に造られた像）で立像りゅうざう（立ち姿）や坐像ざ（坐る姿）に作られます。菩薩（仏の一段階前で悟りを求める人）の中でただ一人頭を丸めた僧形そうぎやう（お坊さんの姿）で、衲衣のうえ（ころも）をまとい、右手に錫杖しゃくじやう（つえ）、左手に宝珠ほうじゆ（たま）のお姿が一般的ですが、合掌がっしやうしているお姿もあります。人間の悩みや苦しみを聞き、錫杖をもっていっしょに歩いてくださる

ような親しみやすいところが人気の要因でしょう。とく



地蔵菩薩

に子どもの夜泣き、いぼとり、子育て、厄よけなど現代でも頼りにされる仏さまです。「〇〇地蔵」といろんな名前をもったお地蔵さんが沢山おられます。墓地の入口などに六体揃った地蔵さんが立っていますがこれは六地蔵と呼んでいます。

3 **馬頭観音** かんのん 観音菩薩のグループの一員で、他の観音とちがって忿怒相ぶんぬそうという怖い顔をしています。やさしい顔では云うことをきかない人々に、怖い顔をして救わなければならない時もあります。頭上の宝冠ほうかん（かんむり）に馬頭（馬のお顔）をいただいていますから見分けるのはやさしいでしょう。宝馬ほうばが四方を駆けめぐり、魔物を打ち破ることを表しています。馬頭を

いただいていることから運送業の人たちの信仰を集め、次第に馬の供養塔や墓標(お墓)になり、時代が下がって交通守護神的な信仰が加わって路傍に立てられるようになりました。地藏と一、二を争うほどの造立数です。



馬頭観音

4 **観音菩薩グループ** 馬頭観音を含めた、観音の変化像(姿、形をかえたお像)があり、そのなかの主な像です。

イ 聖観音(正)…観音さまの基本の形で、頭に化仏(阿弥陀如来のミニチュア)のついた宝冠をいただき、蓮華(はすの花)をもっています。

ロ 如意輪観音…右手を頬にあてたお姿で持ち物に宝珠が宝輪(車輪の形)があります。如意というのは思いのままということです。主に坐像で寺院や墓地で見られます。



如意輪観音

ハ 十一面観音…お名前の通り頭上に十一面か複数のお顔があります。たくさんのお顔で衆生を見守ります。

ニ 千手観音…お名前の通り沢山の手がありますが、石仏の場合はたいてい数が省略されています。多くの人を救う手です。

5 **庚申塔(こうしんさま)** 江戸時代を通して私たちの先祖は講(同じ信仰をもつ仲間のグループ)を作って庚申をお祀りしてきました。庚申というのは「かのえさる」のことで、暦の60日に一度めぐってきます。庚申のあたり日は夜を眠らずに過ごして延命長寿を願う信仰です。こういう話が伝えられています。“人間の身中に住む三尸という虫が庚申の日にそっと天にのぼり、天帝(天の神さま)にその人の罪を告げ生命を締めようとしている。だから庚申の夜は身を慎み三尸が抜け出さないように眠らずに見張っている”というのです。講中が集まってお互いに情報交換をしあい、農作業の相談をしたり、噂話をしたりして、ある意味で信仰という名のリクリエーションだったのでしょう。爆発的に流行した証しが各地に建てられている庚申塔で、庚申講の人たちの記念塔なのです。そのお姿は他の仏さまとは大分変わっています。「青面金剛」という仏がご本尊(中央におかれる仏尊)になったものが多く、第一に怖ろしいお顔、一面六臂(顔は一つ手が六本)、髪は逆立ち蛇を冠にし、腕や腰にも蛇をまきつけ、足の下に邪鬼をふみつけているという奇怪な尊像です。見分け方は石の面に3匹の猿が彫られています。庚申のかのえさるの日なのでそれと関連させ、また目、耳、口をふさいで見ざる、聞かざる、言わざるを重ねたものでしょう。そのほか太陽、月、2羽の鶏がついているものがあり、見るほどに不思議なお姿です。日本人の創造力はすばらしいと思います。次回は飯能の石仏でぜひ見ていただきたいものをご紹介します。石仏は机の上ではなく現地で直接手に触れ目で確かめていただきたいと思っております。

庚申塔



飯能市の歌碑—万葉から現代まで

飯能市文化財保護審議委員会委員
飯能歌人会会長・埼玉県歌人会理事
綾部 光芳

1 **はじめに** わか たんか きざ 和歌（短歌）を石に刻み関係の深い地に建てたものを歌碑と言います。市内にはおよそ10数基の歌碑がありますが、ここではその中の5基について紹介いたします。

2 **阿須の万葉歌碑** あす おおともの 今から約1300年前に大伴家持によって編纂された万葉集巻十四「東歌」に次の歌が収録されています。

こま あや ひとづまこ
あずの上に駒をつなぎて危ほかと人妻児ろを
息にわがする

この歌は「崩れそうな崖の上につながれている馬が危ないように私は人妻であるあなたに恋をしてしまった。

もし、止めようとするなら、ただちに命を失うほかはない」という意味ですが、ここで、崖を意味する「あず」とは飯能市阿須を指すとの学説をもとに、平成8年(1996)3月に地権者・飯能古典の会・飯能歌人会



阿須運動公園 万葉歌碑

などの関係者の協力のもと書家の大野篁軒染筆の東歌を根府川石に刻んだ歌碑が阿須運動公園の見晴らしのよい一隅に建立されました。

3 **若山牧水の歌碑** わかやまほくすい 明治18年(1885)宮崎県に生まれた若山牧水は、昭和3年(1928)44歳の短い生涯の間に日本各地を旅して各地に300以上、歌人として最も多くの歌碑が建立されています。埼玉県内に建立されている歌碑の中で最も多いのは牧水の歌碑で、県内で公式に知られている牧水歌碑は五基ありますが、その中の二基が飯能市こんりゅうに建立されています。



飯能市民会館駐車場 若山牧水歌碑

しらじらと流れて遠き杉山の峽のあさ瀬に
河鹿鳴くなり

大正9年(1920)4月に秩父から飯能まで2泊3日の旅をしたとき1泊したのが名栗のラジウム鉱泉でした。歌集『くろ土』の「秩父の春」の連作の中の一詩で、牧水夫人の若山喜志子の書を刻み、昭和36年(1961)6月に建立されました。現在は飯能市民会館の前にたてられています。

ちろちろと岩つたう水に這いあそぶ
赤き蟹あて杉の山静か

大正6年(1917)11月、飯能市内で2泊した牧水は主



大松閣 若山牧水歌碑



発行：飯能市教育委員会生涯学習課（文化財担当） 〒357-8501 飯能市大字双柳1-1 Tel (042)973-2111
第6号 平成23年3月31日発行 平成18年3月31日創刊

飯能の石仏と土蔵・店蔵建築を学ぼう

● 第6号の特集は「飯能の石仏と土蔵・店蔵」
今回は石仏と土蔵・店蔵建築を取りあげました。
市内には多くの石仏があります。3回シリーズで
飯能の石仏を紹介しておりますが、今回が第3回

目となります。また、まちなかには古い建物が残
されていますが、今回はこの中から土蔵・店蔵建
築をご紹介します。

特集「飯能の石仏」 第3回

日本石仏協会会長
飯能市文化財保護審議委員会委員長
坂口 和子

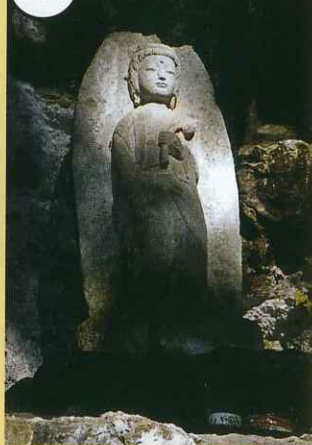
はじめに 特集「飯能の石仏」の第1回では「石仏ってなに？」にお答える形で説明をいたしました。「どこにあるのか・いつ造られたのか・何のために造ったのか・その種類は・一体の石仏から何がわかるのか」というものでした。第2回は石仏の種類とお像の姿そしてその信仰についてお話しました。全国的にみて種類としていちばん多いのはお地藏さま、次が観音さま、3番目が庚申さまですが、飯能も同じようにこの三つが分布しています。第3回は飯能市域でぜひ見ていただきたい石仏をご紹介します。

保に1体あります。飯能市域の石仏造立は寛文のときから始まりました。

2 **閻魔と奪衣婆（赤沢・勝林寺跡）** えんまさまを知っていますか？嘘をつくといえんまさまに舌を抜かれるといわれて昔のこどもには恐ろしいものの一つでした。これは中国式の服装をした地獄の裁判官です。死んでから地獄に落ちないように、という信仰のあらわれです。右の老婆はだつえばといつて三途の川（地獄の渡し場）を渡ってくる亡者の着物をはぎとる役目です。どちらも風化してかわいいお顔になりました。文政12年(1829)の造立です。

1

聖観音（下名栗・尾須沢鍾乳洞） 木漏れ日を



聖観音

うけて静かにたたずんで
いるお姿はやさしい女性
のような観音さまです。
こうもり岩と呼ばれた岩
山にだれがおまつりした
のでしょう。寛文7年
(1667)に造られたの
で、すでに344年も経
っています。市内でいち
ばん古い石仏です。同
じ年号の虚空蔵菩薩が
高山南久



閻魔

奪衣婆

3

弁才天と十六童子 (上直竹上分・弁天橋傍)

弁天橋という小さな橋のそばで静かに小川のせせらぎを聞いている弁天さまです。頭上に鳥居をのせお



弁才天と十六童子

顔は残念ながら潰れていますが端正なたたずまいです。坐像の下は弁天さまの従者である十六童子がかわいらしく彫られています。弁天さまは福德・芸能・学業成就の信仰があり、このお像も女性の造立です。

4

俱利伽羅不動 (上直竹上分・富士浅間神社)

天然記念物タブの木のある浅間神社境内奥に滝があります。その滝壺を背にして変わった石像が立っています。これは不動明王の別のお姿で、宝剣を龍が呑み



こむ形に造られています。くりから不動と呼ばれ昔はあまご雨乞いを祈願したといえます。

俱利伽羅不動

5

勝軍地藏 = 愛宕さま (小岩井・無量寺裏山)

姿・形の変ったお地藏さまです。お地藏さまは丸い頭がしまりなのですが、これは胃をかぶり鎧を着



勝軍地藏

て馬にまたがっているお姿です。あたごさまと呼ばれ、「火伏せ(山火事など)をお願いしました。

かわいらしいお人形さんのようなお像ですが彫りは精巧です。隣の一体は足が折れています。勝軍地藏と秋葉権現が並んでいる一対が原市場の房ヶ谷戸にあり、やはり火伏せの仏さまです。

6

見返り地藏 (白子・長念寺)



見返り地藏

見返り地藏と呼ばれるお地藏さまがあります。足元にひとりの童子、錫杖には幼児がとりつき、お地藏さまはやさしいまなざしで振りかえています。死後の世界でも衆生を救ってくださるといってお地藏さま、とくにこどもたちをいつくしむお姿です。

7

十六羅漢 (飯能・天覧山)

の裏山天覧山の山腹に十六体の羅漢さんが安置されています。羅漢さんは修業者の最高位にあるお釈迦さまのお弟子さんです。お姿の精巧な彫りは見応えがあります。背中に飯能の寄進者の名が刻まれており江戸末期に奉納されたことがわかります。



十六羅漢

以上簡単にご紹介しましたが、飯能全域には沢山の石仏がのこされています。ご先祖が心をこめて造り祈った石仏を未来に向けて大事にしていきたいと願っています。

飯能市に残る土蔵・店蔵建築

飯能市教育委員会生涯学習課
主査
熊澤 孝之

1 **はじめに** まちなかには様々な古建築が残されていますが、今回は、土蔵と店蔵を取り上げ、ご紹介いたします。

店蔵建築とは、蔵の火に強い構造と、店舗建築の構造が合体してできた建築様式で、飯能では明治30年代から徐々に建てられるようになっていきます。

現在市内には4軒の店蔵建築が残されています。

2 **中清** 店蔵と袖蔵がセットで残っている数少ない建物です。

現在の店舗の裏に明治期の店蔵が残されており、わずかに屋根の一部を見ることができます。当時店蔵の前には広い空間が用意され、商品の積み下ろしの荷車を停めたり、市の際に店を出す場所に使用されていました。

脇の袖蔵は、江戸期の建築と伝わっていますが、詳細な年代はわかりません。しかし蔵内部の柱には、「武州一揆」の時の刀傷が明瞭に残っており、歴史の生き証人としてその時代を現代に伝えてくれています。



(本町：中清商店)

3 **銀河堂** 店蔵とそれに続く建物の配置がよくわかる建物群です。

店蔵は下屋部分が改築され現在喫茶店として利用されている明治期の建物です。

通りに面して栄えた所では、間口に対して奥行き長い敷地が一般的で、西側の駐車場から見るとよくわかりますが、通りに対して縦に建物が並びます。店舗の奥に居住空間の主屋（居宅や蔵前と呼ぶ）が続き、その奥には商品を入れておく中蔵が並びます。その奥には中庭が



(本町：銀河堂)

配され、日光を取り入れ、風通しをよくする役目をもっていました。中庭付近に勝手場や風呂、便所が作られません。その奥は離れとなっていますが、ここに土蔵が作られることもありました。

4 **店蔵絹基（市指定文化財）** 絹基は篠原甚蔵・長三親子によって明治37年に建築されました。

明治期は、絹の買い継ぎ商（生糸や絹織物を買付け、税を納めて問屋に売る仲買の一種）を営んでおり、その商売で蓄えた財を元に、この建物が建築されました。

絹基は間口3間と小振りですが、木材や装飾は贅の限りを尽くしています。まず、1階の屋根（下屋）の上には「うだつ」があがっています。うだつは、「うだつが上がらない」の語源になったもので、隣家の火災から2階の窓を守る防火壁です。市内の建物ではこの絹基だけに認められます。次に外壁は、最高級の黒漆喰仕上げです（1・2階居宅側の外壁は当時のままです）。通常の漆喰（白）で仕上げた後、半乾きの状態で黒漆喰を重ね、職人の手で磨き上げて仕上げます。最も手間のかかる仕上げ方法です。また、軒先の瓦には、「八に甚」の文字が陽刻され、うだつの瓦には「きぬや」の文字がみられます。入間市小谷田にあった「瀧澤」という瓦店に特別に依頼して焼かせた瓦を用いています。

最後に屋根の棟には、高く瓦が積んであります。両側には非常に大きな影盛が見られます。棟を大きくすることで建物全体を大きく見せているのです。棟の飾りは「青海波」と呼ばれる模様で、瓦を4段積んで波を表現して



板戸で閉められている状態・修理前



修理後

(本町：店蔵絹甚)

の壁には、このように板を取り付けて漆喰を保護していました。

入口電業は屋号を「入口」といいます。この屋号は、「縄市」の入口にあたる家であったために付けられたものです。反対に広小路の先にある新井家は屋号を「出口」といい、この2軒の間が当初、

います。あらゆる装飾が施された建物とすることができます。棟飾りは瓦と漆喰だけで表現された模様で、瓦職人と左官職人の合作といえるのかもしれませんが。

次に建物の構造を紹介します。正面に見える漆喰塗りの戸は、「板戸」と呼ばれる、防火設備です。西ヨリ第一番、第二番…と書かれています。これは、戸を閉める順番が書かれています。この板戸は普段閉めることはありません。近隣で火災が発生した時にだけ使用します。現在の防火シャッターの役割をしています。

5 **入口電業** 写真中央の土蔵造りの建物が店蔵です。現在は店蔵の下屋部分を取り壊し、新しく店舗がつくられています。しかし、店蔵の下屋以外は大切に残されており、現在も事務所として使用されています。店蔵の妻壁には、下見板が取り付けられています。漆喰壁は風雨に弱いため、正面から見えない側面(妻側)

「縄市」の開かれていた範囲であったと、屋号が教えてくれています。

6 **石黒家の蔵(旧 そば工房・時)** 個人所有の土蔵として大切にされてきた建物です。飯能には、数多くの土蔵が残されていますが、こちらの土蔵のように屋根が土蔵本体に組み込まれているものと、本体は瓦を乗せない切り妻の屋根を造り、その上に木で造った屋根を置いた『置き屋根』(絹甚の土蔵はこのタイプです)の両方が存在します。2階の開口部は、こちらのようなかんのんとびら『観音扉』タイプと、片方へ引く戸がつく『引き戸』タイプが見られます。土蔵は外壁を漆喰で仕上げていますが、風雨に弱い漆喰を保護する目的でその上から下見板を写真のように取り付けることが多かったようです。

現在この建物は内部が改修されており、以前はそば屋を営業していました。



(本町：入口電業)



(八幡町：石黒家の蔵)

お宝スポット



発行：飯能市教育委員会教育部生涯学習課（文化財担当） 〒357-8501 飯能市大字双柳1-1 Tel (042)973-2111
第7号 平成24年3月30日発行 平成18年3月31日創刊

飯能まつりと縄文時代の土偶を学ぼう

● 第7号の特集は「飯能まつりと土偶」

今回は飯能まつりと岩沢の加能里遺跡から出土した土偶を取りあげました。飯能まつりについては、飯能まつりの成り立ちを最初に、山車やお囃

子について、今回から3回のシリーズで紹介していきます。また、平成23年度に調査を行った加能里遺跡から出土した土偶にスポットを当ててみます。

特集「飯能まつり」

飯能市文化財保護審議委員会委員
小槻 成克

① **はじめに** みなさん、飯能の秋の風物詩「飯能まつり」をご存じですか？ 毎年11月の第1土日に飯能の市街地、商店街を会場として盛大に開催されています。昨年(2011)は生憎の雨にたたられましたが、それでも13万人の人出を記録しています。

観光資源としても有望な「飯能まつり」一番の見どころは各町から繰り出す自慢の山車・屋台によるお囃子の競演、曳き合わせです。大勢の観客の前で十分に稽古した演技を披露する囃子連の雄姿は素晴らしい一言です。

今回から3回シリーズで、「飯能まつり」の歴史や飯能に伝わるお囃子、また伝統ある山車や屋台について、より一層関心と興味をもってもらうようお話ししたいと思います。

② **市街地の発展と町内会** 飯能の市街地は、今の大通り(中央公民館から広小路まで)を中心に発展しました。江戸時代、大通りから北側が飯能村、南側が久下分村、広小路から北東方面が真能寺村(今の原町)で、この3村をひっくめて飯能町(宿)と呼ばれていました。江戸初期から縄や笹を扱う「縄市」が立ち、その後絹織物なども扱われるようになり、町はどんどん繁栄します。

江戸時代半ばより飯能町(宿)では市の座割の関係から、村境をまたぐ形で西側から上宿・中宿・下宿の3町に

分かれて自治活動を行っていました。明治時代になると、3町は今の自治会のもととなる三丁目・二丁目・一丁目町内会となり、同時に周辺の河原町、宮本町や真能寺村分の原町地区にも町内会ができます。

③ **「飯能まつり」以前の祭礼** 江戸時代より、飯能村には鎮守の飯能諏訪八幡神社(お諏訪さま)があり、5町内(一・二・三・河・宮)でお祭りし、真能寺村の飯能八幡神社(八幡さま)は原町がお祀りしていました。



平成23年「第41回飯能まつり」ポスター

飯能市民会館の隣りにあるお諏訪さまは永^{えい}正^{しやう}13年(1516)に勧請^{かんじやう}された古社で、祭礼^{あんえい}時安永年間(1770年代)開始とされる3匹獅子舞が奉納されていました。獅子舞が境内だけでなく隊列を組んで氏子5ヶ町をめぐるので見物人が街中にあふれ、各商店の売り出しも盛んで、近隣一番の大きな祭礼でした。

明治の半ばになると、祭礼に山車・屋台を曳いてお囃子を奉納する町内が現れます。明治15年の原町を皮切りに河原町、三丁目、一丁目、二丁目、宮本町が大正末までに、前田(八幡さま氏子)、柳原(旧加治村)が戦後すぐに、それぞれ山車・屋台を手に入れ曳き出すようになります。

祭礼はその後御大典・紀元二千六百年等の大規模記念祭や戦時中断を経て戦後にいたり、昭和32年(1957)開催の市制施行・市域合併記念祭でピークを迎えます。

ところが60年代以降、世の中が高度経済成長期に入ると、アナクロな神社の祭礼は顧みられなくなり、せっかく手に入れた山車・屋台もあまり曳かれなくなるのです。

4 「飯能まつり」新設 その後、昭和40年代に入ると明治百年記念(1968)やディスカバリージャパンキャンペーンに代表される郷土日本の魅力を見直す風潮が起こり、飯能でも観光協会や商工会議所、地元商店街、地元自治会が中心となって飯能まつり協賛会が組織され、昭和46年(1971)第1回「飯能まつり」が全市をあげて開催されたのです。

市街地の山車・屋台曳行はもちろん、郊外地区囃子団体の居囃子での競演、さらに各神社に伝わる獅子舞や鳶組合による梯子乗り、民謡流しパレード、小学児童による鼓笛隊、市民主体の模擬店・催事等々盛りだくさんの内容となりました。

その後、回をかさねるごとに参加団体が増え、山車・屋台参加町内も中山、双柳、本郷が加わり、現在11町



山車の曳き合わせは飯能まつりの華(平成23年)

内が曳き廻しを行っています。

5 「飯能まつり」の特色 「飯能まつり」の特色は①山車・屋台曳行や居囃子、獅子舞などの伝統的行事と市民パレードや模擬店、イベントなどの市民祭りとが程よく融合している点。②神社の山車祭礼を母体としたので、祭りのメインは山車・屋台の曳行と引き合わせだという点の2点ではないでしょうか。

また近年山車による神社参拝(宮参り)が途絶えたり、神社に祭礼幟旗が掲揚されないなど神社祭礼色が希薄になっているのが心配な点です。

一方で①祭礼時の町内会の事務所である「会所」が復活している、②お祭りの会場である各商店街に昔ながらの街頭装飾(軒端揃い)が継続されている、③山車の隊列が「万燈が先頭で手古舞が続く」など従来通りで変更がない、④参加する囃子連をはじめ町内の人たちの服装がいずれもお揃いの長着(着流し)または裃で統一されている等、他所のお祭りではすたれてしまった昔ながらの祭礼作法を守っているところが素敵であり、見どころでしょう。

次回は「飯能まつり」の華、お囃子についてお話ししましょう。

祭礼日の変更 お諏訪さまと八幡さまの祭礼はともに9月26・27日で同日開催していましたが、その日は台風の特異日でもあり、せっかく準備したのに荒天で中止の年も多かったそうです。「飯能まつり」になると今度は晴れの特異日である11月2・3日に変更となり、さらに平成11年(1999)からは、よりお祭りに参加しやすいように週末の11月第1土曜・日曜日に改められました。

1 **はじめに** 遺跡を発掘すると、時として不思議なものが出土します。縄文時代の土偶もそのひとつ…。一言でいえば縄文人が土を焼いてつくった人形(ひとがた)のことですが、この土偶、わたし達現代人のところを強くひきつけるようです(写真1・2)。



写真1 中期の土偶(加能里遺跡21次)



写真2 後・晩期の土偶(加能里遺跡24次)

ひとつ例をあげると、2009年度に東京国立博物館で開催された「国宝 土偶展」

は、なんと10万を超える人が見学に訪れたそうです。土偶の神秘的な造形にたくさんのひとが関心を持っていることの表れでしょう。

2 **土偶とは** 日本各地の縄文時代の遺跡からはこれまでにさまざまな土偶がみつっています。土偶には乳房や妊娠を示す表現が多くみられることから、おもに女性を写した姿といわれています。また完全なかたちでみつかることはまれで、壊れていることがほとんどであると指摘する研究者もいます。誕生や再生、豊穡を願ってつくられたもの、わざと壊して病気やケガの身代わりをしてもらう^{よりしろ}依代、といった性格が土偶の役割だと考えられていますが、具体的には未だなぞに包まれています。

3 **加能里遺跡で新たにみつかった土偶** 2011年に大字岩沢の加能里遺跡でおこなった第43次調査では、縄文時代後期の土偶が3点もみつかりました。調査地点は入間川の第3段丘崖線の下にあたり、すぐ近

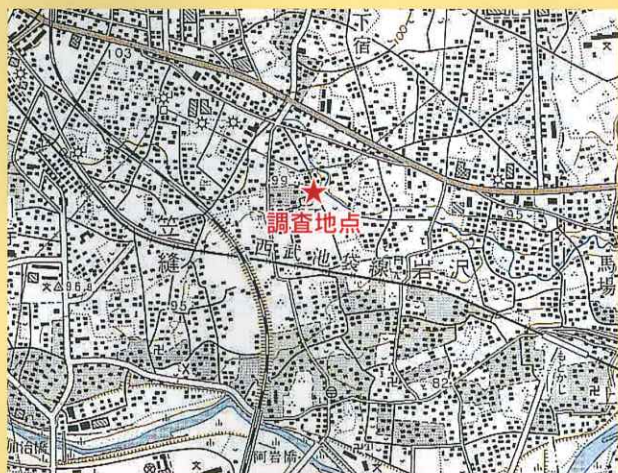


図1 加能里遺跡43次調査地点 (1/25,000『飯能』国土地理院をもとに作成)

くには今でも崖線から湧水が流れ出ています(図1)。この調査では縄文時代の後期末葉～晩期初頭の住居跡と、当時の湧水が流れた跡と考えられる砂礫層がみつっています。次にこの調査で出土した土偶を見てみましょう。

写真3は、住居跡を覆う土のなかからみつかりました。顔を下にして出てきたのではじめは何かわからなかったのですが、裏返してみるとなんと穏やかな表情の土偶ではありませんか! 発掘現場に歓声があがりました。両腕と下半身が欠けていましたが、立派な土偶です。

横長の頭に、中央には縦長の粘土粒を貼り付けた鼻、目は幅の広い隆帯上にヨコ線で表現されています。あごは粘土帯で輪郭が強調され、口は丸い穴となっています。

写真4は砂礫層のなかからみつかった土偶で、目の表現は省略されていますが、3の土偶とよく似た特徴をもっています。丸く大きな口が特徴的です。

3・4の土偶の後頭部に注目してみると、3は一部とれてしまっていますが、両方ともC字状の曲線的な装飾が貼り付けられています。実は同じ特徴をもつ土偶が加能里遺跡の14次調査でもみつっています(写真5)。

これらは縄文時代後期の「山形土偶」と呼ばれる土偶の仲間で、中でも後頭部のC字状の貼付けは関東北西部に多くみられる特徴です。ちなみに3・4・5は5→4→3の順に徐々に新しくなっていくと考えられるのですが、こうした土偶がある時期、飯能を含めた地域で伝統的に作られてきたことを示しています。今回みつかった3・4は関東北西部の土偶づくりの伝統の中に位置付けられるのです。

またこれらとはちがった特徴をもつ土偶もみつって

います。写真6は砂礫層のわきに掘られた穴の壁際からみつかった土偶で、小さな頭部には穴のあいた耳がつけられています。眉・鼻・あごは粘土の貼り付けによって表現され、目の表現はありません。また口は横長の穴となっています。両腕は前方に向かって曲がっており、胸部には先が二つに尖った道具でつけた文様が施されています。おそらく両腕を前方で組み、足を曲げて座った姿勢をとる「屈折像土偶」とよばれる土偶の仲間と考



◀写真6 図2 合掌土偶
43次出土土偶(3)

えられます(図2は国宝となっている青森県八戸市風張遺跡の通称「合掌土偶」で、屈折像土偶の代表的な例です)。屈折像土偶の発見例は東北地方に多く、起源地が東北地方に求められる土偶です。6は関東地方で見つかった屈折像土偶のなかでも古い特徴を備えており、地域をこえた当時の人びとの交流や土偶に関する情報の伝わり方を明らかにする上で貴重な事例といえます。

土偶そのものの使い方や意味にたどりつくのはなかなか難しいのですが、その土偶がどういった技術・伝統の

のもとにつくられたものなのかを調べていくことで、土偶をつかった祭祀の広



写真7 土偶(3)の出土状況

がりや同一祭祀を執り行なった集団の関係性に近づける可能性があります。研究の途についたばかりでまだ結論め

いたことをいうことはできませんが、今回出土した土偶は加能里遺跡をのこした縄文人の性格を探る上で重要なものであるといえるでしょう。

4

地中にねむる歴史へのとびら

土偶の表情をじっと見ていると、はるかな時を飛び越えて縄文人と直接つながったように感じることも、逆に全くわからなく感じることも

あります。写真の土偶を見て少しでも心が動いたなら、すぐそこに過去へのとびらが待っています。土偶をつかった縄文人たちはどのような生活を送っていたのか、どのような社会を築き、またその中で土偶はどんな役割を担っていたのか…まだなぞは残されたままです。ぜひここを入りに口に地中から発せられるメッセージに耳を傾けて

みませんか!

(土偶のように、足もとにねむる地域の歴史に興味をもってもらう入り口となるような遺跡・遺物を今後も紹介していきます!)

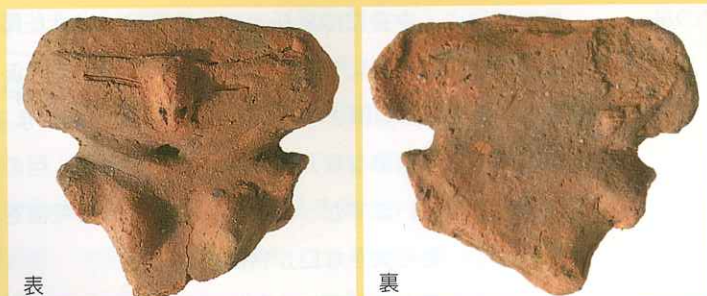


表 裏
写真3 43次調査出土土偶(1)



表 裏
写真4 43次調査出土土偶(2)



表 裏
写真5 14次調査出土土偶



発行：飯能市教育委員会教育部生涯学習課（文化財担当） 〒357-8501 飯能市大字双柳1-1 Tel (042)973-2111
第8号 平成25年3月29日発行 平成18年3月31日創刊

飯能の山車と植物を学ぼう

● 第8号の特集は「飯能の山車と植物」

今回は飯能市内の山車と植物を取りあげました。飯能の山車については、前号の特集「飯能まつり」に続いて第2回目となります。

また、市内の植物については、加治丘陵の四季の植物を紹介します。『お宝スポット』を片手に市内を散策してみてもはいかがでしょうか。

特集「飯能の山車」

飯能市文化財保護審議委員会委員
小槻 成克

1 **はじめに** お祭りに華を添えるのが、賑やかな祭り囃子です。飯能のお囃子の大半は、山車や屋台で乗演されます。飯能のまちなかのお祭りには、お囃子と山車・屋台が「つきもの」なのです。

2 **山車と屋台** 本来、山車は天上の神様がお祭りの日に限って天下る際の目印であり、降臨された神様を乗せて氏子地域を巡る「移動神座」なのです。そのため目印として榊や御幣などを高く掲げているものが多く、飯能を含む関東では、中心である江戸東京にならい人形を目印とした四つ車(三つ車)の山車(江戸型人形山車)が広く流布しています。一方の屋台は、地上に降られた神様をお慰め申し上げるため、芸事などを行う「移動舞台」で、車輪付きの土台に柱を建て、唐破風屋根が乗っている形状が関東では一般的です。

このような姿形も使用目的も違う山車と屋台ですが、江戸期の終わりごろには、お囃子を演じる舞台の付いた山車や、屋根上に人形を載せた屋台まであられ区別がつかなくなり、また名称も混同してしまい、地域によって

二丁目

江戸末(1860年代)に砂川村五番組(現立川市)で八王子型人形山車として建造。大正9年(1920)取得後平屋根屋台に改修され現在に至るも、永年実働で老朽化が進み、近年、文化庁補助事業による復原修復を実施(2010~2012)、神功皇后像を戴く当初の姿を取り戻した。市指定有形民俗文化財。

まちまちに言いあらわしています。現在飯能地方では山車・屋台のどちらも「山車」と呼んでいます。

3 **飯能まちなかの山車** 飯能市域では明治の初めころ、南高麗地区間野、直竹地域での山車建造が始まりのようで、これは南高麗地区が以前から山車祭り



が盛んな青梅地方(東京都)と隣接している影響と思われる。その後、飯能市街地でも明治中頃には鎮守祭礼に山車を曳く町内があらわれます。現存の原町、河原町、三丁目の山車の原型は明治の中ごろ、それぞれ取得したそうです。

大正以降、山車の入手が盛んになり(一丁目、二丁目、宮本町)、神社祭礼はもとより大正御大典祭ごたいてんさい(1915)、昭和御大典祭(1928)、紀元二千六百年祭(1940)等の大規模祭典にも各町内揃って曳行しています。

戦後、早くも復興祭(1946)で山車祭りが復活すると、戦前には持ち合わせていなかった町内会(前田、柳原)が山車建造に動き、市制施行および両吾野・原市場合併祝賀祭(1957)、市制10周年・商工会館落成祝賀祭(1964)

を経て、第1回飯能まつり(1971)では8台の山車が出場しています。その後中山、双柳、本郷と山車取得が続き、昨年(42回飯能まつり)は11台の山車が曳き廻され、ますます賑やかになりました。

4 維持と管理 山車は『和風建築物に人間を乗せて往来を曳き廻す』という特異な使い方のため、次第に駆動部をはじめとする各所が損傷するので、たびたび改修が実施されています。車輪や梶部分の修繕はもとより、近年では老朽化した山車の一部や全体を作り直すところも見られます。また、文化財として貴重であることから二丁目および河原町の山車と原町の山車人形が飯能市の有形民俗文化財に指定されています。

飯能まつりで活躍する代表的な山車



前田
笠幡村(現川越市)發智(ほっち)家旧蔵の山車彫刻を基に昭和22年(1947)四重高欄・唐破風屋根・廻り舞台付山車として建造。盛留(もりどめ)には諫鼓鶏(かんこどり)が。屋台の舞台と山車の銚台が融合した特異な例。



河原町
明治30年(1897)浪花屋(なにわや)七郎兵衛作の三重高欄・欄間仕立て素菱鳴尊(すさのおのみこと)人形を載く江戸型人形山車を37年(1904)静岡より購入。本年度より大規模改修に着手。市指定有形民俗文化財。



原町
原型は明治20年(1887)建造の欄間仕立江戸型人形山車で、26年(1893)より三代原舟月(はらしゅうげつ)作の神武天皇像(市指定有形民俗文化財)を飾る。昭和55年(1980)現在の入母屋屋根に改修し、様相一変。



柳原
昭和22年(1947)に単層唐破風平屋根の屋台として建造。平成に入り屋根取換、車輪車軸取換、彫刻補充等大規模な改修が続き、特に昨年(2012)は念願の廻り舞台併設にいたる。



宮本町
大正14年(1925)高麗村横手(現日高市)の岡野桂之助により単層唐破風平屋根・廻り舞台付屋台を建造。桂之助は一丁目屋台(1920)も手掛ける。堂宮彫師・佐藤光重の彫刻が見所。



三丁目
加藤清正像付の八王子型人形山車を明治中ごろ多摩地区より購入。大正4年(1915)に平屋根屋台に改修し祭礼に参加していたが、本年(2013)彫刻、車輪を残して新造に近い大改修をほどこす。

1 **はじめに** 『はんのうお宝スポット』創刊号の特集「飯能市は植物の宝庫」では、市内に残っている自然林を、(Ⅱ)では二次林について、(Ⅲ)では特徴的な植物を紹介しました。今回から3回に分けて(Ⅳ)加治丘陵の植物 (Ⅴ)天覧山・多峯主の植物 (Ⅵ)名栗の植物 という形で市内に自生している植物について紹介します。

2 **加治丘陵** 加治丘陵は、関東平野と山地との境にあたる丘陵です。標高の一番高い所は青梅市と入間市・飯能市境付近の203.5m(いわゆる二〇三高地)です。西側は青梅市霞丘陵かすみから永山丘陵ながやまに続き、東側と南側は入間市に含まれ、特に南側の台地に占める広大な茶畑は、入間市特有の景観をつくっています。飯能市は丘陵の西北部の地域で、入間川せんちょうでつくられた扇状地の扇頂(旧市街)に位置し、その中央には台地が広がっています。飯能市が占める割合はそれほど多くはありませんが、豊かな植物相をつくっています。

3 **加治丘陵の植物(早春編)** 3月の下旬から4月上旬、コナラやクヌギなどの雑木林中にいち早く花をつける植物が見られます。それらの木々が葉をつける前、りんしょう林床で花が咲き夏まで葉をつけ、林床や地中で過ごす植物です。これら植物をスプリング・エフェ

メラル Spring Ephemeral(春の妖精)といいます。1年でこの短い時期に見られる植物です。代表的な植物は、イチリンソウ、ニリンソウ、アズマイチゲ、トウゴクサバノオなどのキンポウゲ科。ヤマエンゴサク、ジロポウエンゴサク、ムラサキケマンなどのケシ科。カタクリ、ヒロハ



ヒロハノアマナ

ノアマナ、アマナなどのユリ科。それからメギ科のイカリソウなどがあげられます。

雑木林の下で最初に咲く花は、アオイスミレです。淡青色の半開きの花をつけ、目一杯自己主張している姿が可憐に見えます。

カタクリ、イカリソウについては、以前に紹介しました。市の天然記念物に指定されている岩淵

地区から落合の薬師堂近く、また阿須の私有地など、その

群落は見事です。加治中学校の校歌にもカタクリが歌われているので、この近くで見られたのかもしれませんが。

少し遅れてイチリンソウ。この花もカタクリと同じところに咲き出します。阿須のグラウンド近くの雑木林の中にも咲いていました。今では花をつけることはありませんが、細々と生活しているようです。

低木には、ピンク色の小さな花を沢山つけたヤマウグイスカグラや、ヒトの手が届かないがけ治いにはミツバツツジの紫色の花が、遠くから目に入ります。

入間川土手治いには、タチツボスミレ、クサボケの花に混じって、アマナの繊細な姿がみられました。護岸工事で、少なくなってしまったのは残念です。

沢治いの植林地に行くと、わすれな草の仲間であるヤマハリソウの花や、大きな細長い葉をつけるナガバノスミレサイシンの薄紫色の花を見つけることができます。



ヤマエンゴサク



ヤマハリソウ

これら早春の植物は草丈が50センチ以下で、枯れ野の中にいち早く彩りをつけるので、すぐ目につきます。

4

加治丘陵の植物 (春編)

早春の植物の盛りが過ぎると、春植物が見られます。里山の植物として話題になった仲間です。これらの植物は、ヒトが林の中の落ち葉かきをしたり、笹を刈ったりして林床を明るくすると出てきます。キンラン、ギンラン、ササバギンラン、サイハイランなどのラン科。また植林地の沢沿いには、紫の花をつけたトウゴクシソバツナミソウやエビネなど、また入間市と飯能市の境には、ウメガサソウなどが、運がよいと見られます。



キンラン

5

加治丘陵の植物 (夏編)

夏になると、草丈の大きな植物が目につきます。林の中よりも林縁に良く見られます。ヤブカンゾウの朱色、オカトラノオやヤマユリの白色など、大型植物なので見分けが容易です。

6

加治丘陵の植物 (秋編)

秋になると、花とともに果実が色づきます。花はシラヤマギク、シロヨメナ、ヒヨドリバナ、ヤクシソウなどのキク科。ツルリンドウ、リンドウ、センブリなどのリンドウ科。ヤブマメ、ヤブツルアズキ、ヤマハギなどのマメ科。

果実では、ツルリンドウ、ガマズミ、オトコヨウゾメの赤い実。ムラサキシキブ、ヤブムラサキの紫色の実。オオバタンキリマメの開いたさやの端につく赤褐色の実。11月下旬から良く林の中で見られます。鳥にその実を食して、種子を遠くに運んでもらうため、より一層カラ



オオバタンキリマメ

フルになってきます。

7

番外編

地味な植物で、あまり目に入らないが、珍しい植物。それからつい最近、県内で初めて自生が確認された植物があります。

前者の代表的なのが、イネ科のハイチゴザサ、イラクサ科のトキホコリ、シダ植物でウラボシ科のコシダなどがあげられます。その生育地はすべて入間市側ですが、後者の代表がヒメフタバランで、これは飯能市側です。



ヒメフタバラン

加治丘陵は市街地に近く、四季それぞれ多様な姿を見せてくれます。自然を体験しに是非足を運んでみて下さい。



発行：飯能市教育委員会教育部生涯学習課（文化財担当） 〒357-8501 飯能市大字双柳1-1 Tel (042)973-2111
第9号 平成26年3月31日発行 平成18年3月31日創刊

飯能の屋台囃子と植物を学ぼう

● 第9号の特集は「飯能の屋台囃子と植物」
今回は飯能市内の屋台囃子と植物を特集しました。飯能の屋台囃子については、3回シリーズの最終回となります。これまでの内容を参考に、改

めて飯能まつりなどを見てもみるのも良いのではないのでしょうか。また、飯能の植物については、前号の加治丘陵の植物に続いて天覧山・多峯主山の植物を特集します。

特集「飯能の屋台囃子」

飯能市文化財保護審議委員会委員
小槻 成克

1 **はじめに** 現在飯能各地で祭りやイベントが盛んに行われています。

なかでも伝統ある寺社の祭礼では、神事のほかに付け祭りとして獅子舞やお囃子、双盤鉦、太神楽等の郷土芸能が多く見受けられ、とりわけ屋台囃子は比較的手軽なためか、今でも多くの地域で実演・伝承されています。

2 **いつから** もともと、屋台囃子は地元の神社の祭礼を一層賑やかにするために取り入れられた余興の一つです。当初は近在の囃子連を呼んで演奏してもらっていたところ、囃子の演奏自体が楽しいと知った地元の青年たちが中心になって習い覚え、地域に根付いていきました。

飯能に囃子が伝わった時期は定かではありませんが、言い伝えによると江戸末から明治の初め(1860年代)にかけて南高麗地区の間野や下畑で神社の祭礼に山車を曳き、屋台囃子を乗演したといわれ、また原市場地区の石倉では江戸末頃から太神楽獅子舞の合間に屋台囃子を演奏していたようです。飯能地区原町でも明治初年に川越新宿町から屋台囃子を習い覚えたそうで、飯能では少な



くとも明治初年には屋台囃子が伝わり、演奏していたようです。

その後、屋台囃子は隣接、または経済的・人的に関わりが深い地域に伝播し、自前の山車や屋台を手に入れて地元の神社祭礼に繰り出すなど、ますます盛んになり及び、現在飯能市内では24の囃子団体が活動しています。

3 **2大流派** 飯能で活動している囃子団体は「神田囃子大橋流」(8団体)、「小田原囃子若狭流」(11団体)、「神田囃子系囃子」(2団体)、「太神楽系江戸囃

子」(2団体)、「神田流馬流」(1団体)の5系統ありますが、大半が「大橋流」と「若狭流」の屋台囃子を奏しています。

「大橋流」は、入間市東金子地区新久より南高麗地区の下畑、上畑に、また新久から入間市西武地区仏子を経由して精明地区の双柳にそれぞれ伝承され、その後吾野地区や飯能市街地各町へ伝わったのち、毛呂山町、越生町、川越市、坂戸市など他市町へ伝播しています。

一方、「若狭流」は、川越の新宿町から飯能地区の原町へ伝わり、その後飯能市街地各町や越生町、入間市、坂戸市、狭山市などに伝承されます。

どちらの流派も東京の神田囃子など現行の「江戸囃子」にくらべ、バチ数も少なくリズムも単調でテンポもゆっくりしており、古風な曲調を伝えていると思われます。

4 **お囃子の実際** 飯能に伝わる屋台囃子は、江戸囃子のなかの「五人囃子」で、篠笛=1人、附太鼓=2人、大太鼓=1人、摺り鉦=1人の5人一組で演奏します。
 ヤタイ ニンバ シチヨウメ ショウアン カマクラ カン
 曲目は「屋台」「仁羽」「四丁目」「昇殿」「鎌倉」「神田丸」などが代表的で、「仁羽」「四丁目」は単調なフレーズを繰り返す賑やかで軽快な曲、「屋台」はダイナミックなバチさばきが聴きどころの江戸囃子を代表する曲目、「神田丸」は一つとして同じ叩き方を繰り返さない難解・高度な曲、「昇殿」「鎌倉」は静かものとも呼ばれる、笛の妙技を魅せるゆっくりとした格調ある曲です。

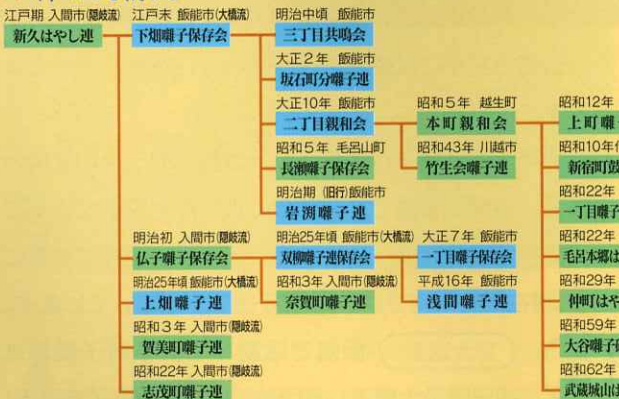
実際の演奏では、笛のリードで緩急取り混ぜながら各曲を次々に演奏する組曲スタイルで行われ、聴く者を飽きさせない構成となっています。

また多くの曲には面踊りが付き、「仁羽」「四丁目」にはどっけ道化(ヒョットコ、オカメ、バカ面等)、「屋台」では天狐、けどう外道そして獅子などが演じられます。特に外道は大振りな面を使って両手に幣束を持ち、祈りにも似た全身をよじる所作で観客を魅了する飯能を代表する踊りです。

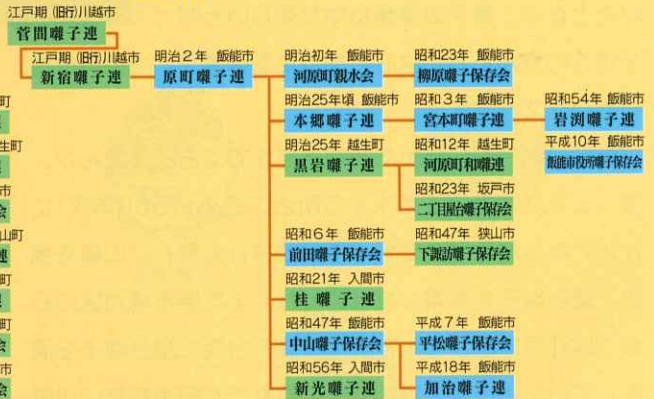
5 **「囃子連」** 屋台囃子を演奏する団体を「囃子連」(=囃子保存会)といい、町内会や神社に属し町内会館や社務所で定期的に練習会を行って囃子技術の向上をはかり、町内代表としてお祭りに臨んでいます。当初は囃子好き同士の愛好会でしたが、近年では大人から子どもまで幅広い世代が参画して、青少年の健全育成・次世代への継承を視野に入れ活動しています。市街地など複数の町内会が参加するお祭りでは、各町囃子連の競演が対抗意識を生んで技術の向上をうながし、祭りに活力を与えているそうです。

6 **これからの課題** いつまでも隆盛が続くと思われた囃子ですが、近年の少子化による子ども世代の減少は深刻で、このままだと屋台囃子伎芸の次世代継承も心配です。特に農山村部の囃子連は、会員の高齢化と相まって会の活動・存続も危ぶまれます。このような危機的状況を脱するため、各囃子連では地域に居住していなくても、地域に縁がなくても加入可能にしたり、地元小学校で屋台囃子講習会を開催するなど、祭礼以外のイベントにも積極的に出かけ子どもたちに実演の機会を増やしたりして、子ども会員の確保に力を注いでいます。

◆ 神田大橋流



◆ 小田原若狭流



◆ 神田囃子系

◆ 太神楽系江戸囃子

◆ 神田流馬流



1 **天覧山・多峯主山** 天覧山(195m)・多峯主山(271m)は、山地帯から丘陵帯へと移る場所で、その南に入間川があり、その川が形成する扇状地の扇頂に位置しています。その北には、高麗川が流れています。市街地に近いにもかかわらず、スタジイなどの自然林、コナラなどの二次林、スギ・ヒノキの人工林や、谷津田の休耕田や湿地、草原など比較的自然が良く残っています。休日になると、森林浴をかねて多くの人たちが散策に訪れます。ここでは散策の折に植物も観察できるように紹介します。

2 **湿地の植物(天覧入り)** 市民会館の駐車場を出発して、能仁寺の西側、川沿いを歩いていくと、休耕田・湿地に入ります。市内では水田が少ないので、湿地の植物は、そう多くありませんが、意外と珍しい植物があります。

春、雑木林のコナラの葉が展開していない明るい湿地には、一面黄色い色をした花が咲いています。ネコノメソウです。この花を見ると、春の到来が感じられます。道沿いには、うす青い色をしたセリバヒエンソウ(帰化植物)、スマレの仲間を見ることができます。



ネコノメソウ

初夏～夏になると、ヌマトラノオ、オカトラノオの白花。チダケサシの桃色。ノカンゾウ、ヤブカンゾウの橙色。盛夏には、ミスタマソウの白い花とともに、水玉のような果実。

秋になると、ススキ(古名は尾花)の下にはナンバンギセル(古名は思い草)。この植物は、ススキの根元によく寄生します。ここはススキの群落が多いので、ナンバンギセルがよく出てきます。万葉集の歌の中に、

「道の辺の尾花が下の思ひ草

いまさらさらに何をか思はむ」

という歌があります。それが思い出されます。湿地には、

ミノソバ、サクラタテ、シラゲヒメジソ、アキノナギツカミなどの桃色。ヤマハッカ、アキノタムラソウなどの紫色。ユウガギク、ノコンギク、シロヨメナなどの白色。ヤブツルアズキやキンミズヒキの黄色。また、葉腋にむかごをつける



ナンバンギセル

セリ科のムカゴニンジン。水田にはヘラオモダカなど多くの植物が見られ、より一層鮮やかな季節になります。

3 **山の辺の植物** 能仁寺の東側、天覧山に登るハイキング路を登っていくと、湿地とは異なる植物があります。

春には林の中にミツバツツジの紫色。林床にはシュンランをはじめ、キンラン、ギンラン、ササバギンラン、少々湿ったところには、エビネの可憐な姿を目にします。ヤマツツジが咲く頃には、緑が一段と鮮やかになります。新緑の季節の到来です。少し遅れて同じツツジの仲間ですが、ハイカツツジの白い花を見つけることができます。白い小さな花を、ウメの花に見立てていますが、清楚な感じがする植物です。

ノヤマトンボ(オオパントンボソウ)、コ克蘭などが咲き始めると夏の季節です。

夏というと、やはりヤマユリの白い清楚な花が代表でしょう。茎の先端にたくさんの花を重



エビネ

そうにつけています。独特な香りを出していますので、すぐにわかります。オオバギボウシ（トウギボウシ）の淡紫色の花は大きくて、林の中でもよく目立ちます。春先の若葉は「ウルイ」と呼ばれ、ほんのりとした苦味とぬめりがあり、山菜としてよく知られています。



オオバギボウシ

秋になると、やや湿ったところには、アケボノシュスラン。林床にはキッコウハグマ、カシワバハグマ、シラヤマギクなどのキク科植物や、木の実、草の実が良く目につきます。ムラサキシキブやヤブムラサキなどの紫色。ツルリンドウ、ガマズミ、オトコヨウソメ、ウメモドキ、マンリョウなどの赤色。瑠璃色るりいろのノブドウ。やや大きいカラスウリの朱色。花はかわいいが、いやな臭いがする黄土色の実をつけるヘクソカズラなどが私達を楽しませてくれます。



ツルリンドウの実

4

シダ編 ここにはシダ植物だけでも約80種類あり、県内でも珍しい種が自生しています。ナチクジャク、キヨスミヒメワラビ、ウラジロなどがそ

れです。やや湿ったところに生育していますから、登山道から確認することは難しいです。また車道には、石垣の中にヒメウラジロ、吾妻峡にはヘラシダなどがあります。これらは県の希少野生植物に指定されています。



ナチクジャク

5

番外編 ハンノウと名前がついた植物には、ハンノウザサとハンノウツツジがあります。ハンノウザサは、1926年に植物学者の牧野富太郎先生により新種として、植物研究雑誌に発表されました。現在はアズマザサの品種として考えられています。また、ハンノウツツジはサツキとヤマツツジの雑種であろうといわれています。ヤマツツジと他種のツツジ類との交雑種は、日本各地でたくさん見つけられています。ハンノウツツジも、その1つではないかと思われています。ちなみに飯能南高校はハンノウザサ、飯能高校はヤマハンノキ、市内の多くの小学校・中学校はハンノキを校章に用いています。すべてハンノウに由来していますね。



飯能高校



飯能南高校



一例として飯能西中学校



発行：飯能市教育委員会教育部生涯学習課（文化財担当） 〒357-8501 飯能市大字双柳1-1 Tel (042)973-2111
 第10号 平成27年3月31日発行 平成18年3月31日創刊

飯能の植物を学ぼう

● 第10号の特集は「飯能の植物」

「飯能市は植物の宝庫」は今回が最終回となります。そこで、最後に名栗地区の植物について4ページにわたって特集しました。

これまで市内に自生している様々な植物について紹介してきましたが、この特集が飯能市の植物に関心を持ち、保護していくための一助となれば幸いです。

特集「飯能の植物」

飯能市は植物の宝庫(VI) —名栗の植物—

日本薬科大学
山下 裕

1 **はじめに** 旧名栗村の地域は、西は秩父市や横瀬町に、南は東京都青梅市や奥多摩町に接しています。大部分が山間部で占められていて、その一部には石灰岩地という特異的な場所があります。そこには、石灰岩地固有の植物が見られます。また、^{なごう}名郷を中心に奥武蔵の山々の登山ルートがあります。ハイキングがてら植物の散策探究も楽しいと思います。

2 **石灰岩地の植物** ^{せみざす}蟬指石灰岩地は、名郷から武川岳方面に行くところで、登山口にはモミ林があります。そこから少し登った急傾斜地に、クマシデ、イヌシデ、イタヤカエデ等の林とミズナラ林があります。ここは県の特定植物群落に指定されています。

また、以前に記録されたキヌタソウ-ミズナラ群落並びにクマシデ群落が、小規模ながら残っており、稜線にはカヤの高木があります。石灰岩地の大部分は、採石によって消滅していますが、これら群落は、二次林であっても貴重な^{りんぷん}林分には違いありません。

草本類は、春はカタクリの群落をはじめ、イカリソウ、ヒトリシズカ、フデリンドウ、アケボノスミレ、ヒナスミレ、センボンヤリなど。初夏にはユウシュンラン、ヤマウツボ、マルバサンキライ、マルミノウルシなど。武

川岳登山口近くにはモミ林及びフユザンショウなど。山頂付近にはカタクリの群落もみられます。



イカリソウ



フデリンドウ

白岩方面の石灰岩採掘地域は、鳥首峠から少し名郷方面に下ったところで、石灰岩の岩壁に生育しているキンモウウラビ、ミヤマウラジロ、ヤハズハハコなどの植物が生育しています。

3 **ウノタワ (入間川源流域) の植物** 入間川と浦山川の分水嶺になっている大持山から鳥首峠にかけての稜線に、尾根が少し低くなっているところがあります。ここがウノタワです。この沢を横倉入といい、大持山から流れ出す入間川の源流です。この沢沿いには

サワグルミの林がみられます。シオジ林と並んで冷温帯の代表的な溪畔林けいはんりんのひとつです。春先この林床には、トウゴクサバノオ、ハナネコノメ、ヤマエンゴサクなど山地性の植物が生育しています。ウノタワ方面にしばらく急坂を登っていくとクリミズナラ林になります。林床にはシコクスミレ、ヒナスミレ、ナガバノスミレサイシンなどのスミレ類。また、カタクリなどが生育しています。



ユウシュラン



ヤマエンゴサク



ヤマウツボ



トウゴクサバノオ



ウノタワの風景

稜線に出たところがウノタワです。20年ぐらい前はここが湿原になっていたそうで、ノハナショウブやヤマシャクヤクなどが自生していたそうです。現在はシカの食害の為、丈の大きな草本類はなく、だいぶ乾燥した状態になっています。稜線にはブナが見られます。飯能市側は大径木が散在しています。秩父市側には所々まとまったブナ林になっています。

4 しらやさわ **白谷沢から棒ノ峰（棒ノ折山）の植物** 河又地区の龍泉寺社寺林には、ウラジロガシ、ツクバネガシの混生林があり、稜線にはモミの木もあり、林床がシキミーベニシダ群落になっています。冷温帯から暖温帯への移行部森林植生が見られます。

河又から直接棒ノ峰へ登る滝ノ平尾根には、アズマシライトソウの大群落とヒイラギソウ、オオバチドメ、コミヤマスマミレなどが生育しています。

白谷沢沿いの登山道は、有間ダムから直接棒ノ峰へ登り、東京都側に下山するルートになっていて、休日は登山者が多いです。沢沿いに行くルートなので、比較的植物の種類が多いです。葉の中軸先端に無性芽むせいが（新しい個体）をつけて群生するフジシダ。岸壁に垂れ下がるシシラン。中軸が黒っぽくて漆塗りのように見えるウスヒメワラビなどのシダ植物。時期によってはヤマブキソウやヒイラギソウなどの黄色や紫色の花。ツツジ科のイワナンテンの白い花が垂れ下がっていたり、溪流の植物が目に入ります。



白谷沢の溪流



ヤマブキソウ

5 **山伏峠～伊豆ヶ岳～旧正丸峠** 山伏峠から伊豆ヶ岳方面に登っていくと、しばらくはスギ、ヒノキの植林です。しばらくして最初の鞍部に出ます。

南側は急斜面の為、植林ができず、小規模の広葉樹林が残っています。その反対の北側斜面には、カタクリの群落もあります。シカの食害のせいか、下草がきれいになっていません。しばらく乾燥した山道を行くと伊豆ヶ岳山頂に到着します。春先はミツバツツジのきれいなところですが、ここから正丸峠経由で、名栗げんきプラザ方面に車道(旧道)を下山すると、意外と多くの植物が見られます。やや乾燥したところにはミツバベンケイソウ、ヒメウラジロ、ミヤマウラジロ。暗く湿ったところには、コミヤマスミレなど。圧巻はヒラギソウの大群落です。

シカが食べないのか、花の時期には庭先の植物のように手入れされている姿が美しいです。また、げんきプラザ



ヒラギソウの群落



ヒラギソウ

の近くには、沢沿いにザゼンソウの小規模な群落があります。その下流の横瀬町にはザゼンソウの保護区があります。以前はヤワタソウなども見られました。

6

番外編 旧名栗村の花「イワウチワ」

旧名栗村の「花」はイワウチワ(イワウメ科)です。

深山の林の下などに生える常緑の多年草で、群生している場合が多いです。吾野の高山不動尊などにも群生が見られます。以前、川又から棒ノ峰林道へ行く滝ノ平尾根で、ピンク色の大きな花を咲かせているのを見かけました。草丈は小さいですが、その割には大きな花を付けますので、山登りをしている時にその花を見かけると心が和みます。清楚な花です。



イワウチワ